

船 塚 遺 跡

大分県豊後高田市所在遺跡発掘調査報告書

大分県文化財調査報告

第 69 輯

1985

大分県教育委員会

船 塚 遺 跡

大分県豊後高田市所在遺跡発掘調査報告書

大分県文化財調査報告

第 69 輯

序 文

国東半島西部の中心地である豊後高田市には、縄文から古墳時代にかけての多くの遺跡が存在しており、古代から中世にかけては、いわゆる六郷満山文化の中枢として栄え、文化遺産の宝庫として知られているところであります。

同市では現在、主要地方道豊後高田国東線の改良工事が進められておりますが、同市大字美和での工事中に、10基の横穴古墳が発見されました。県教育委員会では、その取り扱いについて、関係機関と慎重な協議を重ねてまいりましたが、この段階での事業計画の変更は困難であるとの結論に達し、記録保存のための発掘調査を行なうこととしました。

その結果、古墳時代後期の横穴古墳11基と中世墳墓1基が発見されました。横穴の残りは良い状態とはいえませんが横穴古墳の構造や副葬品さらに中世にいたっての横穴古墳再利用の状況が確認でき、学術的にも価値の高いものであることがわかりました。

その成果が、今後の文化財保護や学術研究に貢献するところが少なくないものと確信いたします。

最後になりましたが、この調査にご協力をいただいた県道路課・県高田事務所はじめ、豊後高田市教育委員会などの関係各位に対し、心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和60年 3月28日

大分県教育委員会教育長

手 島 誠 一

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が昭和59年度に実施した大分県豊後高田市所在の船塚遺跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は主要地方道豊後高田国東線改良工事に伴って実施した。
3. 本書の執筆は玉永光洋、吉武学が分担した。
4. 遺構・遺物の実測・整図・撮影は主として玉永、吉武が行い、坂本嘉弘（県文化課主任）、後藤一重、小林昭彦、小柳和宏（同主事）、永松みゆき、榎本陽子（同嘱託）の協力を得た。
5. 人骨の分析は田中良之氏（九州大学医学部解剖学第2講座）に依頼した。
6. 本書の編集は吉武が行った。

目 次

I. 調査の経過	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 遺構と遺物	6
IV. ま と め	27
付 雷鬼岩屋古墳	35

挿 図 目 次

第1図 船塚遺跡周辺遺跡分布図	3
第2図 船塚遺跡周辺地形図	4
第3図 1号横穴墓出土遺物実測図	6
第4図 船塚遺跡遺構配置図	7
第5図 1号横穴墓実測図	9
第6図 2号横穴墓実測図	10
第7図 2号横穴墓出土玉類実測図	10
第8図 2号横穴墓出土耳環実測図	11
第9図 2号横穴墓再利用の状況	12
第10図 2号横穴墓出土中世土器実測図	13
第11図 3号横穴墓実測図	14
第12図 4号横穴墓実測図	15
第13図 4号横穴墓出土遺物実測図	15
第14図 5号横穴墓実測図	16
第15図 5号横穴墓出土遺物実測図	17
第16図 6号横穴墓実測図	17
第17図 6号横穴墓出土遺物実測図	18
第18図 7号横穴墓実測図	19
第19図 8号横穴墓実測図	20
第20図 8号横穴墓出土中世土器実測図	20
第21図 9号横穴墓実測図	21
第22図 9号横穴墓出土遺物実測図	22
第23図 10号横穴墓実測図	24
第24図 10号横穴墓出土遺物実測図	25

第25図	土壙墓実測図	25
第26図	船塚遺跡採集遺物実測図	26
第27図	雷鬼岩屋古墳石室実測図	33

図 版 目 次

図版 1	船塚遺跡遠景・船塚遺跡近景
図版 2	1号横穴墓・2号横穴墓中世人骨遺物出土状況・2号横穴墓礎床
図版 3	3号横穴墓・4号横穴墓玄室内の状況・4号横穴墓遺物出土状況
図版 4	5号横穴墓・6号横穴墓・6号横穴墓遺物出土状況
図版 5	7号横穴墓・8号横穴墓・9号横穴墓玄室内の状況
図版 6	9号横穴墓遺物出土状況(1)・9号横穴墓遺物出土状況(2)・10号横穴墓玄室内の状況
図版 7	10号横穴墓遺物出土状況・土壙墓(1)・土壙墓(2)
図版 8	土壙墓人骨検出状況・装身具
図版 9	横穴墓出土土器

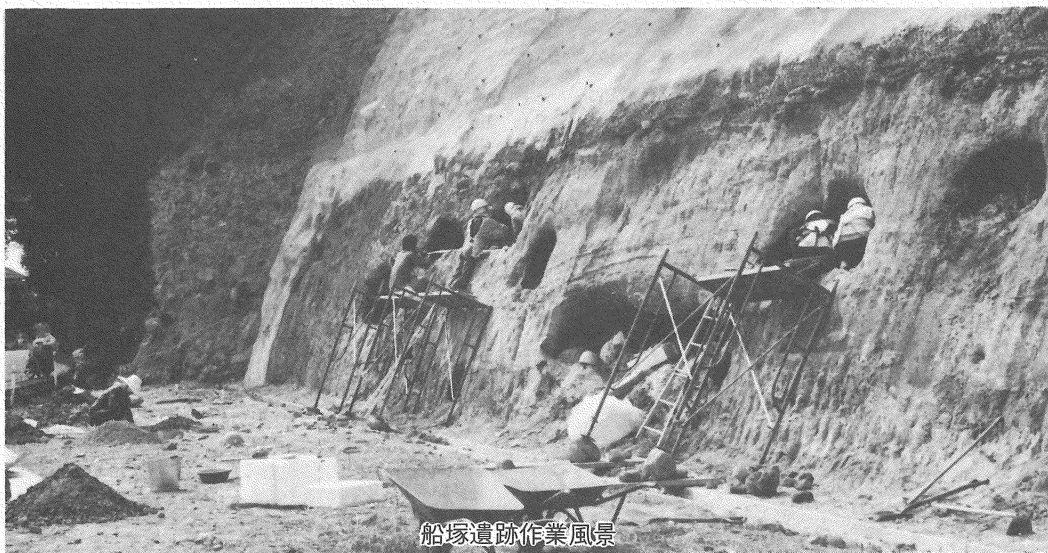
I 調査の経過

主要地方道豊後高田国東線の内、豊後高田市大字美和地点の拡幅工事が着工され、崖面の掘削工事中に横穴墓と須恵器の平瓶と甕の破片が偶然に発見された。県教育委員会では工事の中止を依頼し、ただちに県・市の担当者は現地を視察した。その結果、古墳時代後期の横穴墓が崖面に10基程度は存在していることが判明した。そのため、関係機関と横穴墓の発見された部分の取り扱いについて協議がなされた。しかしながら、拡幅工事はほぼ終了しており、最終工程の崖面の吹き付けの段階まで進められており、この段階での事業計画の変更は困難であるとの結論に達し、遺存した部分の完全な記録保存を行うため緊急発掘調査を実施することになった。

調査は横穴墓を埋めている土の除去から取りかかり、全ての土の水洗を行いながら、玄室内部の調査へと進められたが、内部に水がたまっており、土がヘドロ状を呈していたことや急斜面上に横穴墓が位置していることなどから作業は困難をきわめた。

調査の結果、一部の横穴墓を除き遺存状態がきわめて悪かったが10基の横穴墓と1基の中世墓が検出された。遺物は玉類など水洗で発見されたものもあるが須恵器の平瓶・横瓶・杯・高杯・土師器の壺などの供献用の土器とともに、耳環・切子玉・勾玉・丸玉等の装身具が発見された。また、横穴墓の玄室内の壁面には多くの工具痕が認められ、これらについてもできるだけ記録するよう努めた。

さらに古墳期の横穴墓を中世期にふたたび利用した横穴墓が3基確認され、特に2号横穴墓からは約8体の人骨が供献土器とともに検出された。土壙墓は横穴墓群とレベルはあまり変わらない斜面上で確認され、ここでも人骨の一部が確認された。これらの人骨の分析は九州大学医



学部へ依頼した。

以上のように古墳と中世期の墳墓が検出され、遺存状態が良好とは言えないが、調査例が少ない本地域においては貴重な資料を得たことになる。

発掘調査は、昭和59年4月11日～6月7日の約2ヶ月を要した。

調査関係者は以下のとおりである。

総括 大分県教育委員会

教育長 手島 誠 一

文化課長 高 塩 至

主幹兼課長補佐 塔 鼻 勝 人

調 査

文化課専門員兼係長 後 藤 宗 俊

〃 主任 渋 谷 忠 章

〃 主任 坂 本 嘉 弘

〃 主任 玉 永 光 洋

〃 主事 西 哲 弘

〃 主事 後 藤 一 重

〃 主事 小 柳 和 宏

〃 嘱託 吉 武 学

事 務

文化課主幹兼庶務係長 橋 本 淳 一

〃 主査 伊 藤 正 行

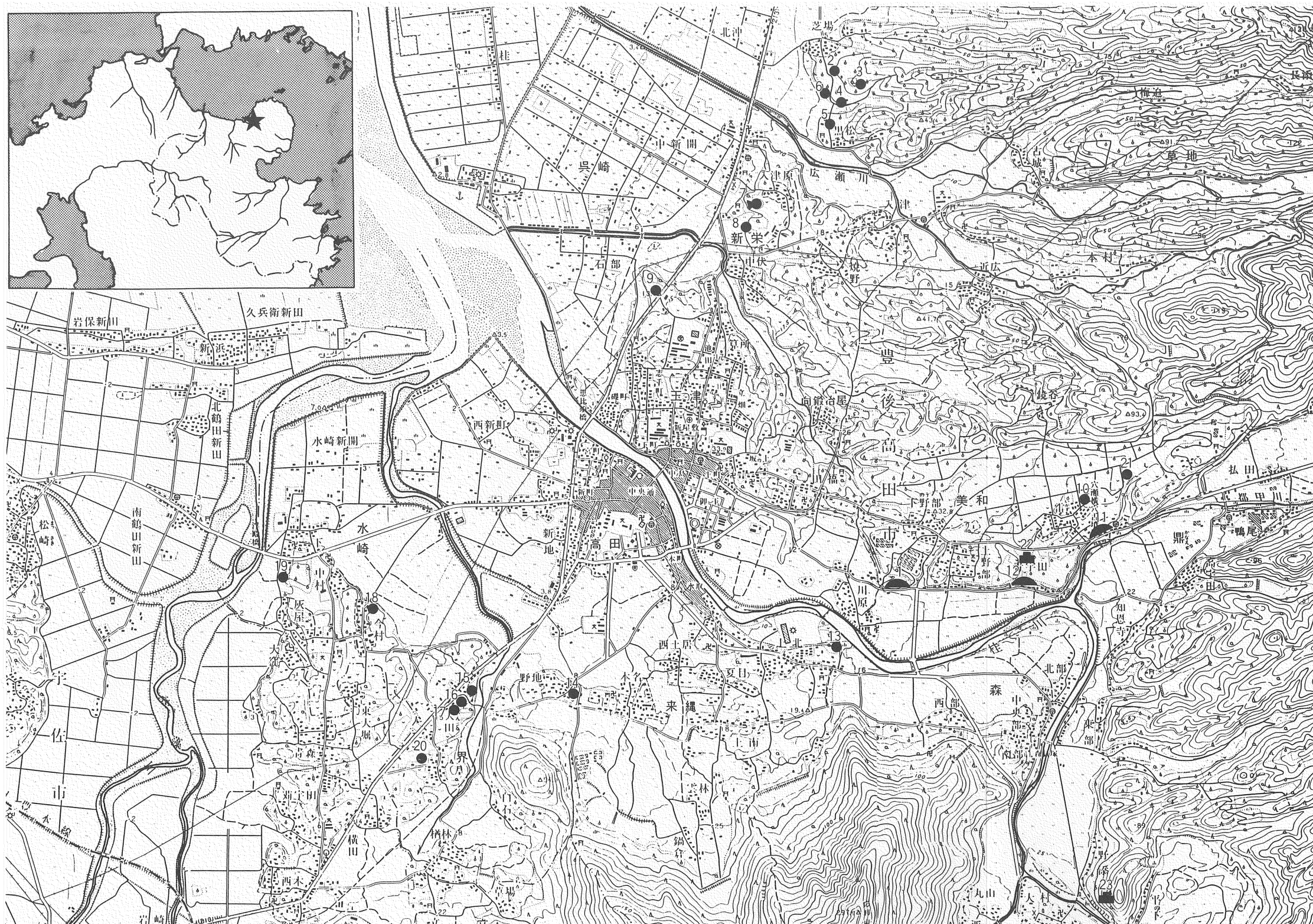
最後に、県道路課、県豊後高田事務所をはじめ豊後高田市教育委員会社会教育課・豊後高田市文化財調査員の関係各位には種々ご協力いただいた。記して感謝したい。

Ⅱ 遺跡の位置と環境

船塚横穴墓群は、田染川・都甲川をはじめとする中小河川を合流し、高田平野の沖積地を貫流して周防灘にそそぐ、国東半島随一の桂川右岸の豊後高田市大字美和字船塚に所在する。

桂川の右岸には、周防灘の海岸線までのびる洪積世台地（通称美和台地）が形成されている。地層は上表にローム層があり、その下に砂礫層（大田・松本層）、中間に粘土層を挟むのが基本的な構成となっている。横穴墓群は美和台地南側の砂礫層を狙って穿たれている。

さて、船塚横穴墓群の所在する豊後高田市は「豊後国誌」や「和名抄」によれば、ほぼ来縄郷にあたり、原始から古代の遺跡が豊富に存在している。



- | | | | | | |
|------------|-----------|------------|------------|------------|----------|
| 1 船塚遺跡 | 5 鑑堂古墳 | 9 志手金比羅山古墳 | 13 来縄金比羅古墳 | 17 鉾塚 2号古墳 | 21 三ツ塚古墳 |
| 2 地藏堂古墳 | 6 笹原古墳 | 10 雷鬼岩屋古墳 | 14 鬼塚古墳 | 18 先山古墳 | 22 殿屋敷館跡 |
| 3 草地金比羅山古墳 | 7 入津原丸山古墳 | 11 穴瀬横穴墓群 | 15 田笛社古墳 | 19 千人塚古墳 | 23 鞍懸城跡 |
| 4 二ツ塚古墳 | 8 大原古墳 | 12 青宇田横穴墓群 | 16 鉾塚 1号古墳 | 20 犬田古墳 | |

第1図 船塚遺跡周辺遺跡分布図



第2図 船塚遺跡周辺地形図（アミ部が調査範囲）

縄文時代の遺跡は、桂川左岸の台地縁辺に点在しており、後期前半頃の森・来縄・水崎貝塚などがその代表的遺跡として上げられる。

弥生時代は集落遺跡としては多くは知られていないが、桂川によって形成された沖積平野周辺に分布を示しており、宇佐平野の青銅器出土地帯とともに、この地域には比較的多くの青銅器が出土していることが特徴となっている。細形銅戈を出した払田大原遺跡・中広ないし広形の銅矛13口を出した来縄遺跡・製品としては唯一の例となる平形銅戈を出した美和雷遺跡などがあり、青銅器の特徴からみて弥生中期から後期に属するものである。

大分県内における青銅器の分布状況を見ると、宇佐から豊後高田に至る周防灘沿岸地域と別府湾沿岸地域とが最大の分布地域となっている。これらの地域は県内における先進地域と言える、沖積地を基盤とした高田平野についても中期から後期にかけて展開をみせていたことが推量できる。

しかし、古墳時代になると、弥生時代の青銅器を出土した小地域には現在までのところ、古式古墳は出現しておらず、市内の北部の新栄から黒松～猫石から金屋にわたる海岸線の舌状台地上に、前方後円墳4基をはじめとする古墳群が形成されている。北から大塚・野内・猫石丸山・入津原丸山古墳が造営されており、また円墳ではあるが神人車馬竜虎画像鏡を副葬した鑑堂古墳がある。この地域には以上のような首長クラスの墳墓群とともに中・小の円墳も多く分布しており、主体部は、この古墳群の最後の首長墓と想定される横穴式石室をもつ野内古墳等が認められるが箱式石棺を主体部とするものが多い。このようにこの地域は4世紀代に比定される鑑堂古墳から6世紀前半頃の野内古墳まで造営されつづけるがその後は衰退して行くようである。

古墳時代後期（6世紀中頃以降）になると上記の古墳群が形成された地域の中で台地上から沖積地に出てきた単室の横穴式石室の志手金比羅古墳等が出現するが、大半はふたたび桂川流域の沖積地周辺に現れる。その分布は桂川の右岸と左岸のグループに分けられる。右岸は、複室構造の横穴式石室を主体部とする雷鬼岩屋古墳や三ツ塚古墳が台地上にあり、台地南側の斜面に彩色を有す穴瀬横穴墓群や彩色の有無は不明であるが、青宇田・船塚横穴墓群が一定の距離をもって形成されている。左岸には沖積地の低丘陵に田笛社古墳をはじめ単室の横穴式石室をもつ小円墳が1～3基程度の小グループで分布している。

このように、6世紀後半～7世紀中頃にかけて、雷鬼岩屋古墳や穴瀬横穴墓群に代表されるように、桂川流域の沖積地帯に諸勢力の集中化傾向がみられ、古墳時代後半～末ではいわゆる来縄郷の中心地域であったことが考えられる。

Ⅲ 遺構と遺物

調査前より、県道の拡幅工事による崖面削平のため、すでに横穴墓は全て開口しており、さらに墓道・閉塞施設・羨門等の横穴墓前面の施設のほとんどが削られていた。調査区間は東西に走る県道沿いに約60m程であり、南面する崖面に横穴墓を含む11基の遺構を検出した。

横穴墓は10基を数えたが、うち羨道部を残していたのは僅かに3基であり、さらにそのひとつに羨門の痕跡が見られたものの、その他の横穴墓は概ね玄室奥半部のみの残欠であった。また横穴墓とは別に、土壙墓を検出したが、人骨を除いて遺物等皆無であり、所属時期等を決定できない。

各横穴墓には西から東へ向って1～10のNOを附した。また、遺跡中央部のゴミ穴(旧防空壕)の壁面に横穴墓天井部の痕跡を認めたのでこれを11号墓とした。横穴墓は各々比高差を有しながらも、ほぼ標高13～14mの同一レベル上に並ぶが、ただし4号墓のみは一段下方に位置しており注目される。また、前述した土壙墓は9～10号墓間の上方約1mに位置しており、東側に伸びるテラス状の遺構を痕跡的に残していた。

1号横穴墓

横穴墓群の西端に位置する。

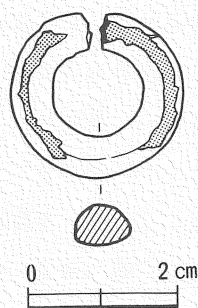
玄室はほぼ残すものの、羨道部より前を完全に失う。玄室プランは平入りの隅丸長方形であり、玄室奥行約130cm、奥壁幅180cm、玄室中央部で最大幅200cm強をそれぞれ測る。側壁が外へふくらみながらドーム形の天井へ続き、奥壁両隅も明確な角をもたずに、全体的に張りのない形となっている。奥壁部で約50cm、玄室中央部で100cm弱の高さを測る。床面は礫床等の施設はないが、玄門附近から玄室中央部にかけて浅い段が見られる。壁全体の遺存状態が不良で工具痕等明確ではない。

玄室左手前より耳環が一点出土した。(第3図)銅胎に金箔を張ったものだが、両面と突き合わせ部で剝落が見られ、遺存は良好ではない。長径2.3cm短径2.13cmで、断面は下方にふくらむ楕円形をなし、0.78cm×0.54cmを測る。重さ9.5g。

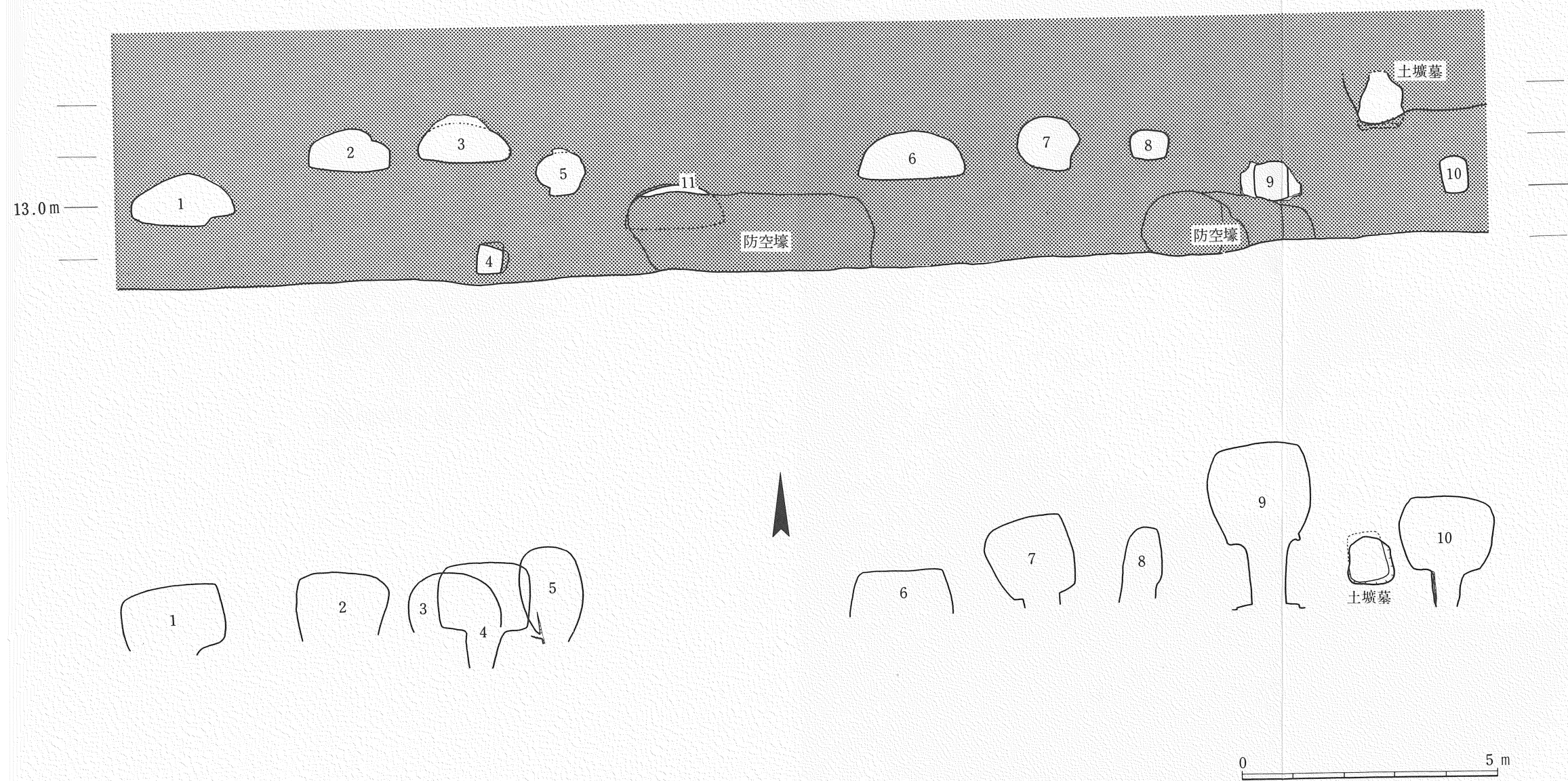
2号横穴墓

1号墓の東約3m、上方約1mに位置する。

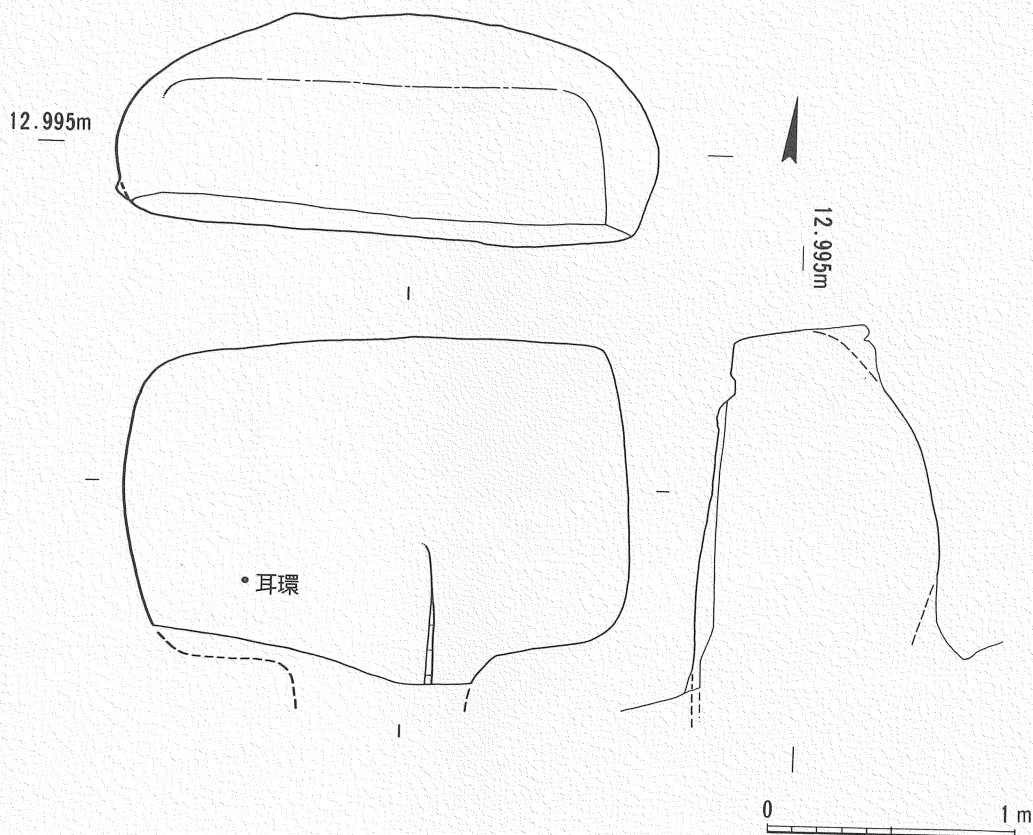
玄室奥半部のみの残欠であり、地層の不整合面に掘り込まれているため湧水が著しく、為に壁面の遺存が極めて不良である。また2



第3図 1号横穴墓
出土遺物実測図(ㄅ)



第4図 船塚遺跡遺構配置図 (1/250)

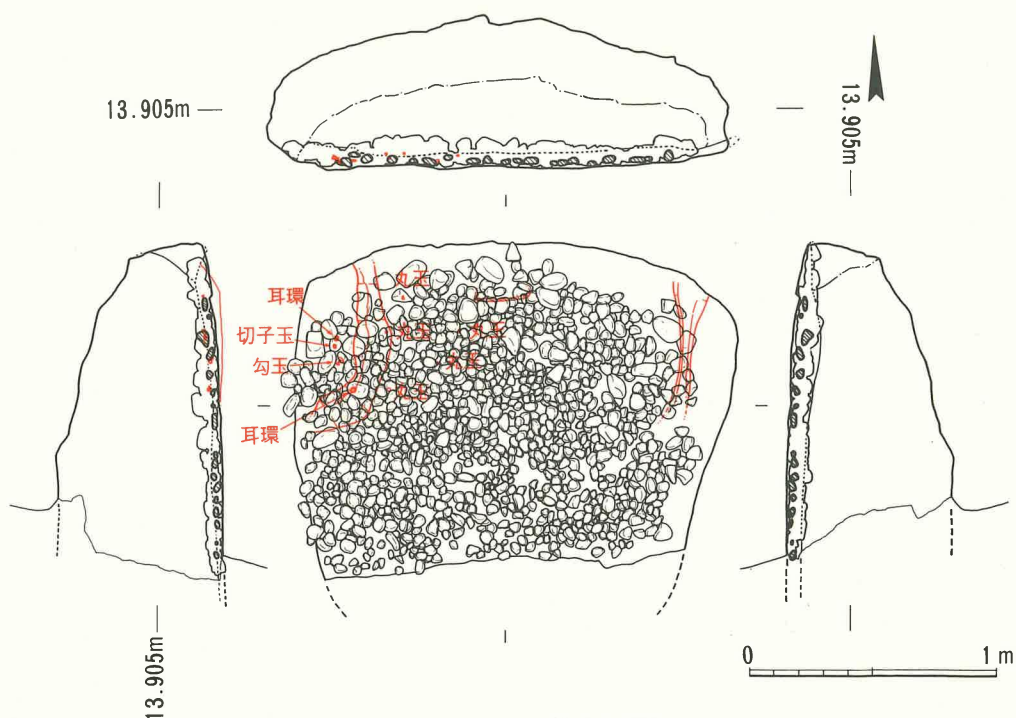


第5図 1号横穴墓実測図 (1/50)

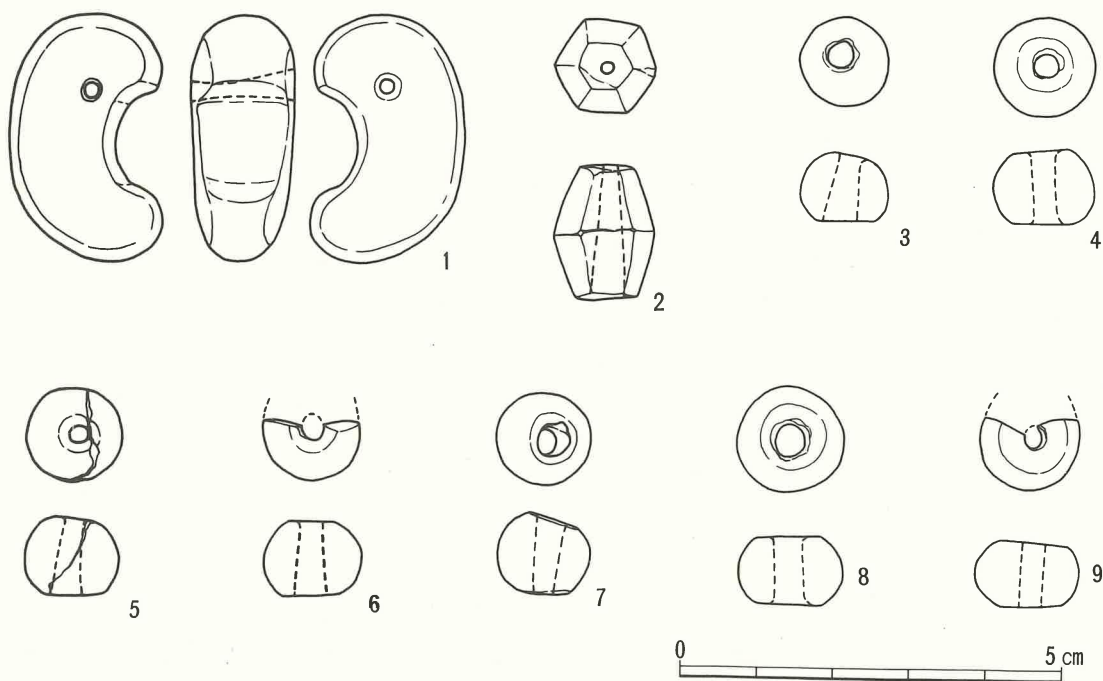
号横穴墓は中世に改葬墓としての再利用を受けており、伴出した土器類とあわせ貴重な資料を提供している。

床面プランは奥に広い逆台形状を示すが、全形については知り得るべくもない。奥壁附近に最大幅をもち、170cm強を測る。天井部はドーム形を意識しているようであるが、非常に低く、最も高い部分でも70cmに満たない。床面全体には礫床を設ける。礫床に用いている石は径4cm前後のものが大半を占めるが、若干大きめの石をも混じえる。さらに左右奥隅には不整形の溝をそれぞれ一条設けており、湧水に備えている。また中央部奥壁沿いにも浅い段が見られた。

出土遺物は勾玉1点・切子玉1点・丸玉8点・耳環2点であるが、これらの多くは玄室左奥部から出土した。一部玉砂利の下にもぐりこんだ状態で出土したものもあるが、概ね遺体の頭位を示すものと理解される。第7図-1はメノウ製の勾玉である。長さ3.3cm、穿孔部で最も厚く1.37cmを測る。全体的に丁寧な研磨が施され、穿孔は片面から行われている。乳白色を呈すが、両平坦面にやや腐蝕が見られる。2は水晶製の切子玉である。全体の造りが粗く、やはり片面から穿孔している。長さ1.8cmを測り、全面に腐蝕が見られる。3～9はガラス製の丸玉

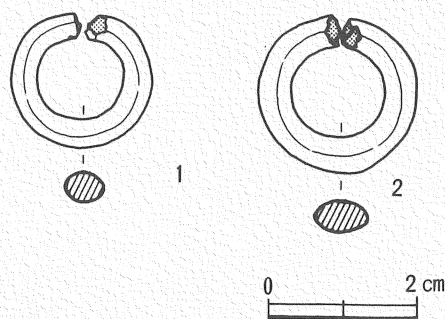


第6图 2号横穴墓实测图 (1/30)



第7图 2号横穴墓出土玉類实测图 (1/4)

である。うち3～6については出土位置をおさえたが、7～9は床面堆積土の水洗中に出土したものである。これら丸玉は大きく分けて2つのタイプが見られる。ひとつは、3・5・6・7に見られるように小ぶりだが厚く、丸みをもった一群で、すべて片面から穿孔されている。他のひとつは4・8・9に見られるように、前者よりも径が大きく、両平坦面を広く明瞭につくり出す一群で、より整った印象を与える。後者はおそらく両面より穿孔を行ったものと見られ、孔の径も大きい。これら丸玉はすべて緑色を呈すが、全てに部分的



第8図 2号横穴墓
出土耳環実測図(1/2)

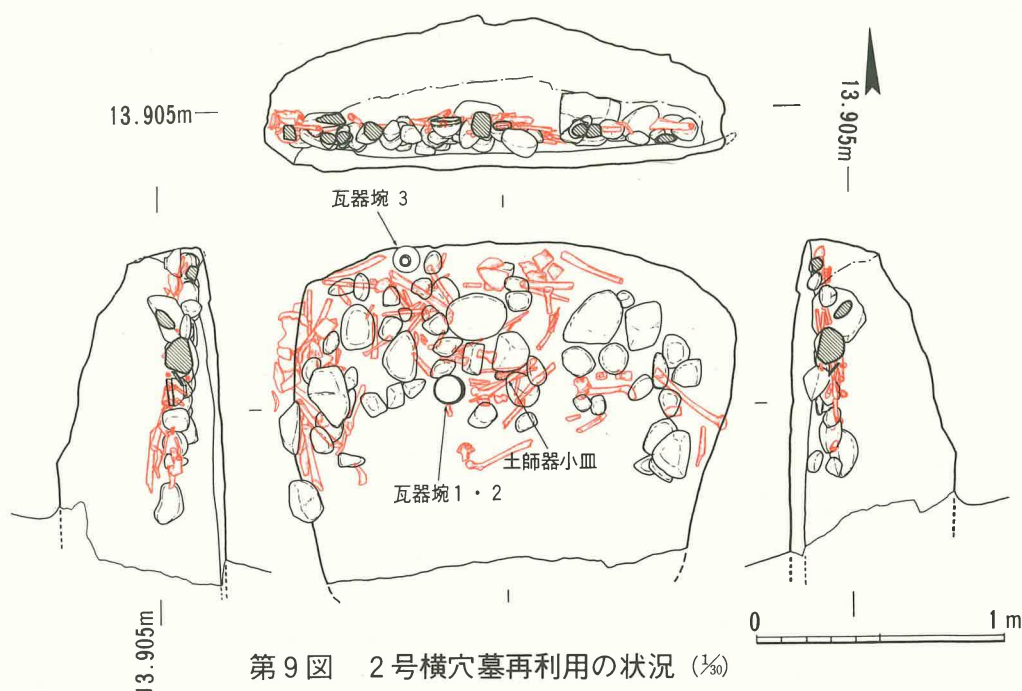
な腐蝕が見られる。また、5・6・7・9等まんなかから2つに割れたものが目立つが、これらの割れ口にまで腐蝕が見られることを注意しておきたい。耳環(第8図)はいずれも銅胎に金箔をおいたものだが、大きさに差が見られる。1は長径1.9cm、短径1.77cm、重量4gを測り、断面形は楕円形をなす。一方2は長径2.12cm、短径2.06cm、重量9gを測り断面形はより扁平な楕円形を呈し、突き合わせ部が狭い。いずれも突き合わせ部で剥落している。

また、すでに述べた様に、2号横穴墓では以上の古墳時代の礫床・遺物を覆った土砂の上面から中世期に属する遺物・人骨を検出した。(第9図)人骨はこぶし大から小児頭大までの大小の礫とともに放りこまれたかのような状況を呈しており、相互の関係を全く保っていない。人骨は横穴墓の全面に広がっており、人骨そのものの遺存状態は良好であった。これら人骨群には瓦器碗3点・土師器小皿1点が供献されていた。人骨は小児から青年にかけて、最低8体以上が確認された。8体のうち7体が成人、1体が小児である。明らかに性別がわかるものについていえば、男性2体、女性2体であり、他は不明である。

瓦器碗は1と2が口縁部を上にして重ねられた状態で出土し、人骨群とほぼ同じレベルで横穴墓の中央やや西側に位置している。3は奥壁に接して、中央西側の位置で口縁部を下にして出土した。4の土師器小皿は1・2の瓦器碗の東側で横穴墓のほぼ中央に位置し、口縁部を上にして、やや斜めになっているが本来は水平におかれていたものと思われる。

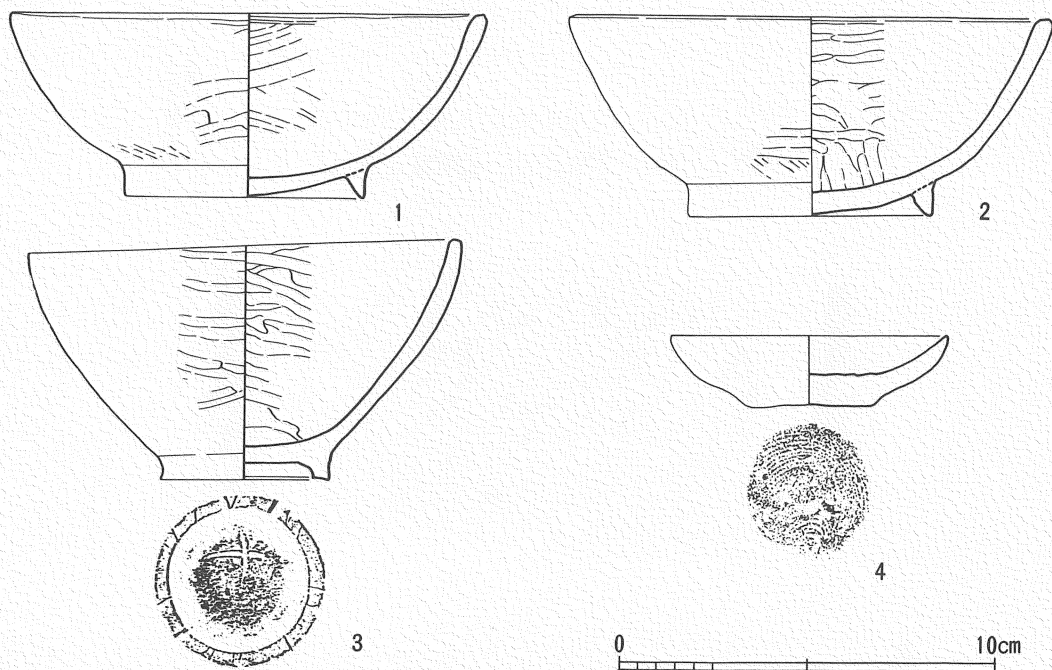
1と2は、形態・調整・法量ともきわめて規格性のつよいものであり、おそらく同一工人の作と思われる。3は1・2と形態が異なっているが焼き上がりの状態や調整などはよく似ており、1・2とセットになるものと考えられる。小皿は出土状態や位置からみて瓦器碗とセットになるものとして一応考えておきたい。

1は、口径12.6～12.7cm、高台径6.4cm、器高4.9cmを測る。高台は低く碗底面とほぼ同一である。断面三角形を呈しシャープな造りとなっている。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部が器壁に比べ肥厚しており、口唇部分の入念な横方向のヘラミガキにより面取りされた状態に



第9図 2号横穴墓再利用の状況 (1/30)

仕上がっている。調整は表面観察から外面はヘラケズリ成形を一部残し全体を入念に横方向のヘラミガキをおこなっている。ただ下半部に関してはミガキを施してなくケズリ痕をそのまま残している。高台接合部は回転利用のヨコナデ仕上げとなっている。高台内については顕著な調整の跡は認められず無調整の状況であり若干の凹凸がみられる。内面はケズリ痕はなく、見込み部に一方向のヘラミガキと体部から口縁にいたる部分に横・斜方向のヘラミガキをおこなっている。内外面とも器表面は平滑仕上げであり光沢を強く有している。色調は以上の調整後内外面とも燻しており黒色～黒灰色を示している。焼成は非常に堅緻な仕上がりである。2は器高が1に比べやや高くなっており、口径12.9cm、高台径6.5cm、器高5.2～5.4cmを測る。調整や形態の特徴は1と同様であるが、高台内面に枝状圧痕風の痕跡が認められる。3は口径11.6cm、高台径4.5cm、器高5.9～6.4cmを測る。1・2に比べ高台径、口径が小さく器高が高い碗形を呈している。高台は低い逆台形をなし、ややふんばったシャープな造りである。体部は内湾して立ち上がり口縁部は平たくおさめている。調整の状態は1・2と大きく変わらないが高台内部はヨコナデ仕上げとなりヘラ記号が認められる。色調、焼成等も他の瓦器碗と同様である。4は土師器の小皿である。口径7.35cm、底径3.2cm、器高1.8cmを測る。口径と底径の差が大きく、内湾気味に外上方へ立ち上がり口唇部が細く尖った状態に仕上がっている。底部は回転糸切り離し痕が認められ、見込み部にもロクロ痕が残っている。体部は回転利用のヨコナデ仕上げで、色調は黄白色を示し、胎土にも多量の微砂粒を含む。焼成は堅緻である。



第10図 2号横穴墓出土中世土器実測図 (1/2)

3号横穴墓

2号横穴墓の東側に隣接して営まれており、横穴墓群中最も上位に位置する。

2号同様玄室奥半部のみを残欠であり、壁面の遺存状態も悪い。

玄室床面は奥壁に向ってなだらかに上昇する。又、玄室左半部が右半部に比べてやや高い。中央部で最大幅180cmを測る。天井部はその大半を失うが、壁面がなだらかに内傾して立ち上がる点から見て、ほぼドーム形に復元できよう。

床面には10～15cmほどの扁平河床礫を敷いて礫床としている。石材そのものにも大小のぼらつきが見られ、敷き方も雑ですき間が目立つ。礫床下には排水溝等の施設はない。

工具痕はほとんど残っていない。

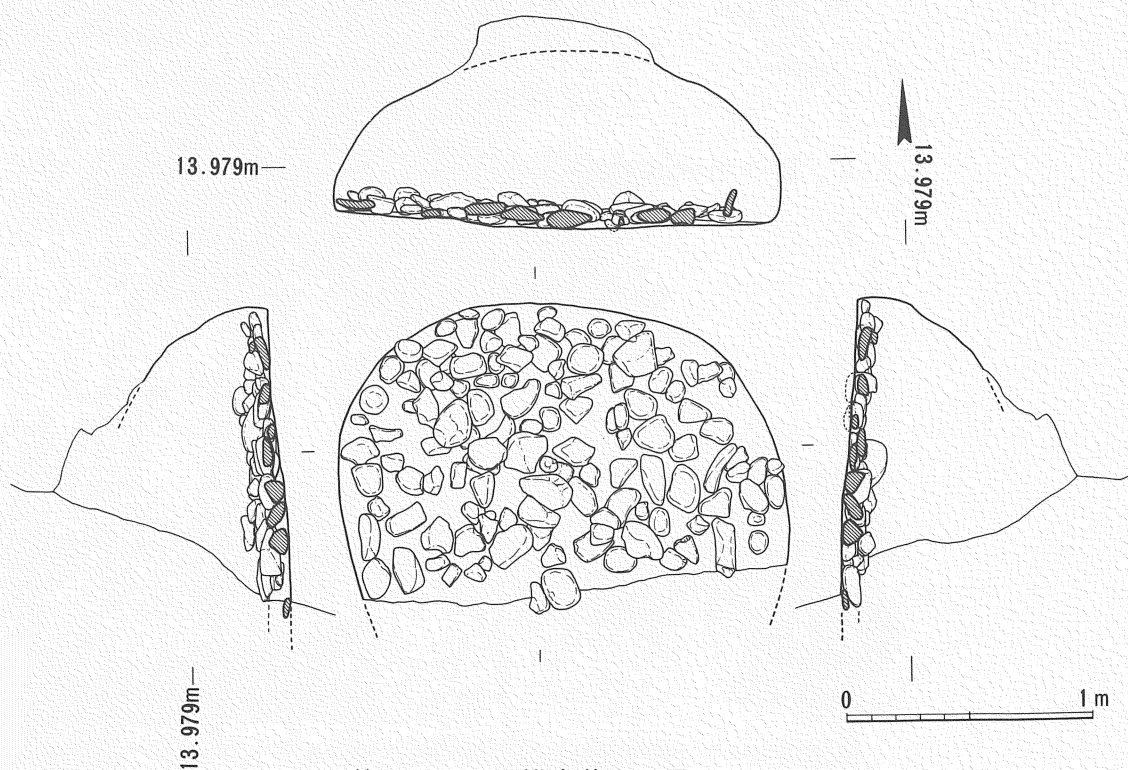
遺物としては須恵器片が出土したが、小片にすぎず、図化し得なかった。

4号横穴墓

3号墓下方約2mにあり、横穴墓群中最も低位に位置する。

羨門より以前を失うが、羨道、玄室は良く残っている。

羨道は手前の残欠部分で幅約40cmを測り、玄室に向って幅を増し、玄門部で幅75cmである。



第11図 3号横穴墓実測図 (1/50)

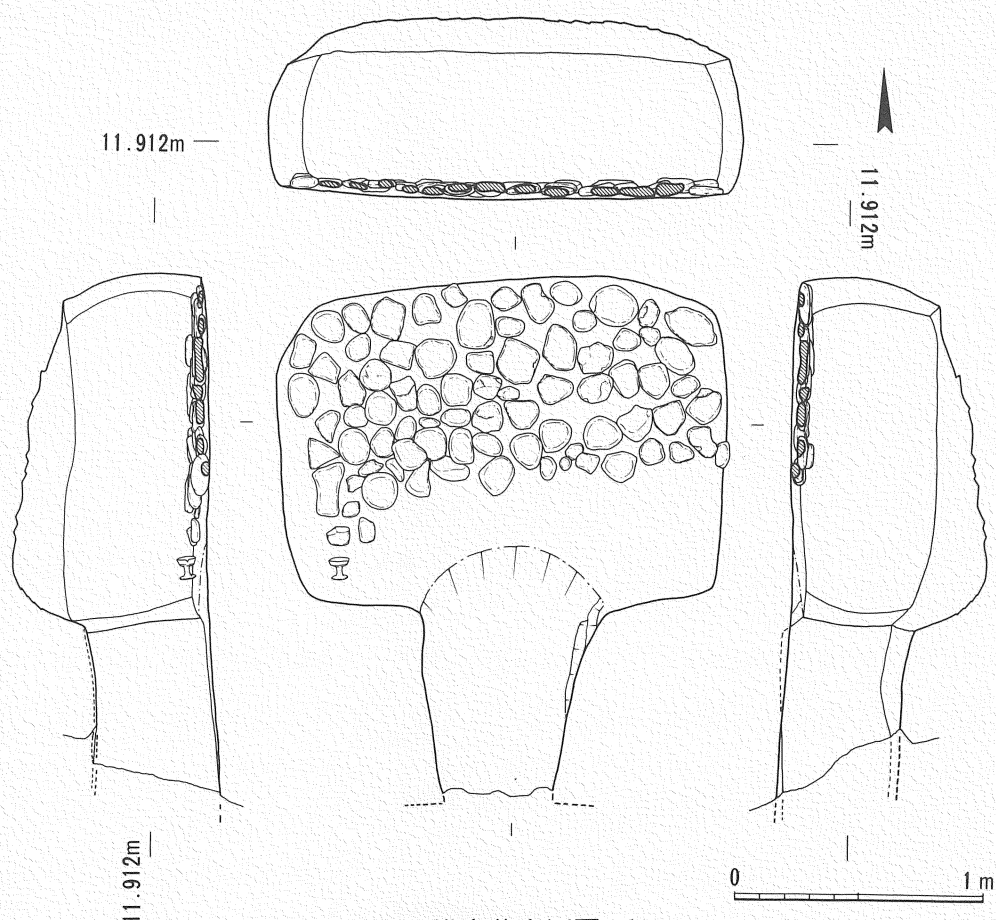
玄室との間には緩かな段を造り出し、両者を区分しており、また側壁、天井部においても両者の境は極めてはっきりしている。さらに、右側壁沿いに不整形の溝を一条設けている。羨道の残存長約70cmを測る。

玄室床面形は平入りの隅丸長方形を呈する。玄室の奥行130cm、奥壁幅約160cm、また玄室奥半部で最大幅約180cmを測る。四壁が外へふくらみながら立ち、天井部との境に稜が巡る。天井部は蒲錐形をなし玄門附近で最も高く約80cmを測り、奥壁へ向って低くなるが、全体的に扁平である。

床面には3号と同様に不揃いの河床礫を用いた礫床を設けるが、いずれも10~20cmの扁平な石を選択している。礫床は玄室奥半部のみに限られ、遺骸一体分を納めるのに適した広さを有している。

出土した遺物は須恵器高杯1点・ガラス製小玉2点である。須恵器高杯は玄室左前壁寄りに寝せた状態で置かれており、ガラス製小玉は玄室内堆積土の水洗中に出土した。

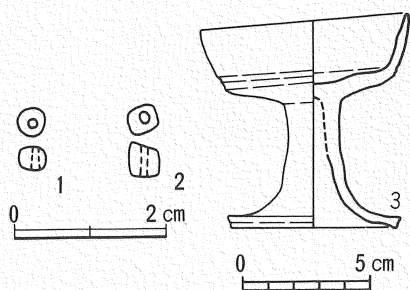
この他、4号横穴墓では、特に玄室上半部に明瞭な工具痕を認めた。(下半部は岩盤が軟弱で残っていない。) 工具としては刃わたり4cm程の鉄斧状のものが考えられ、作業方向は大略右上→左下(ないしは右→左)を示しているが、右壁と前壁の一部では左→右方向の工具痕が認められた。又、天井部の工具の作業方向は大略玄門→奥壁を示すが、奥壁と左側壁寄りには



第12図 4号横穴墓実測図 (1/30)

これと逆方向の工具痕が見られた。

第13図 1・2 はガラス製小玉である。1 は半透明青色を呈し、径 3.38mm、厚さ 2.8mm、穴径 1.0mm を測り、丸く仕上げている。2 は不透明でやや緑味がかかった青色を呈し、径 4.1mm、厚さ 4.2mm、穴径 1.0mm を測るが、切り離れたままの形状を呈し、仕上げが雑である。3 は須恵器高杯である。杯部がやや傾斜しており、口径 8.3mm、器高 7.7~8.8cm を測る。杯部は平底から



第13図 4号横穴墓出土
遺物実測図 (1・2 1/4 3 1/3)

内湾気味の口縁部が立ち上がり、端部で尖り気味におさめている。内底部は脚部に接合する部分が若干くぼみ、その部分に不定方向のナデを施す。また口縁部はその中位あたりで若干内側へふくらむ。杯外底部と脚基部のなす屈曲は明瞭で、脚筒部は、下方へよく開き、端部で凹面をなしつつ下方へ僅かに突出する。文様としては、口縁基部に浅い沈線二条を巡らすのみである。調整は上記した杯部内底面以外

はロクロによるナデ仕上げであり、杯部外面に自然釉がかぶる。

5号横穴墓

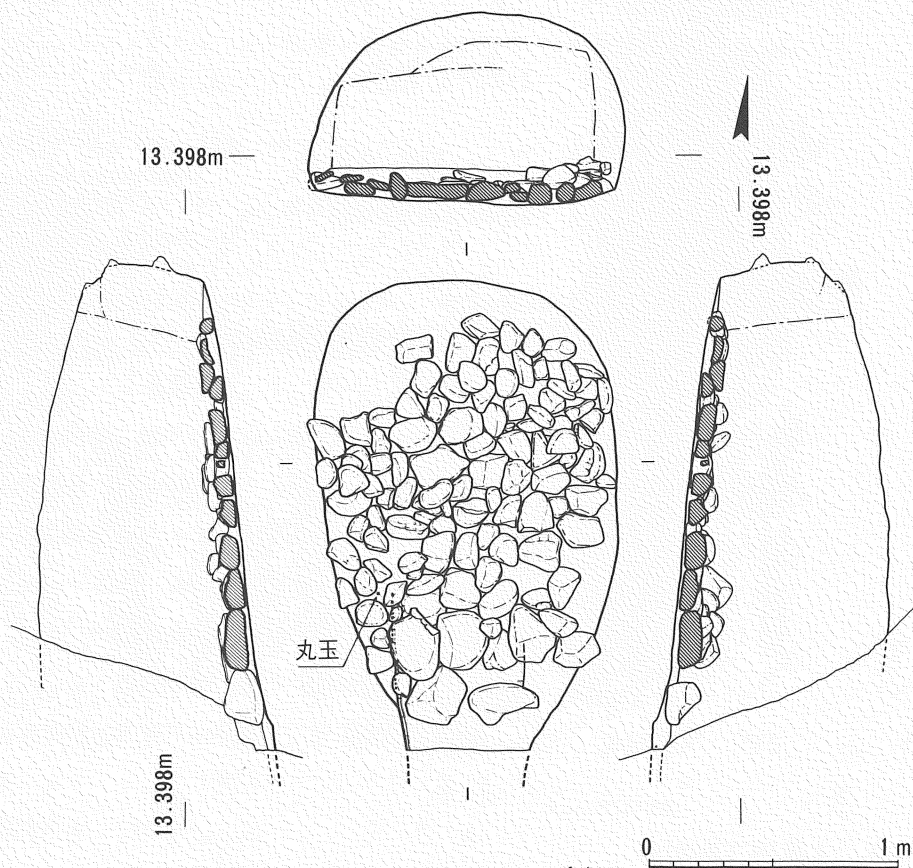
3号横穴墓の東側下方0.5mに位置する。玄室部分を大略残しており、壁面も比較的良く遺存している。

玄室プランは、玄門からなだらかに奥壁に続く長円形をなす。奥行は約170cmを残し、最大幅は、玄室奥半部にあつて約120cmを測る。天井部は蒲錐形をなし、奥壁に向つて緩やかに下降する。

床面には河床礫を用いて屍床を形成している。用いている石材は大小あつてやや雑然とした感があるが、概ね左手前から右奥部に向つて一体分の礫床を設けていることが見てとれる。更に玄門附近から奥に向つて短く浅い段を左右に造り出している。

壁面に残る工具痕から幅約4.5cmの鉄斧状の工具が推定される。加撃の方向は奥壁と左側壁では概ね左→右であり、右側壁では右→左を示している。

出土した遺物はガラス製丸玉1点のみである(第15図)。表面は白色の厚いパティナに覆れ、



第14図 5号横穴墓実測図 (1/30)

色調は不明である。径11.3mm、厚7.9mm、穴径3.8~2.8mmを測る。
丸く厚みをもっており、2号墓出土の3・5・6・7に類似する。

6号横穴墓

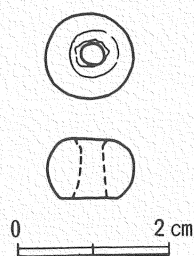
5号横穴墓の東側約7mにあり、レベル的には5号とほぼ同等である。やはり玄室奥半部のみの残欠である。

床面全形は知り得ないが、残欠部より見て方形を基調としたものであろう。奥壁部での玄室幅は約150cmを測る。また奥壁が丸みをもって立ち上がる以外、天井形については知り得ない。

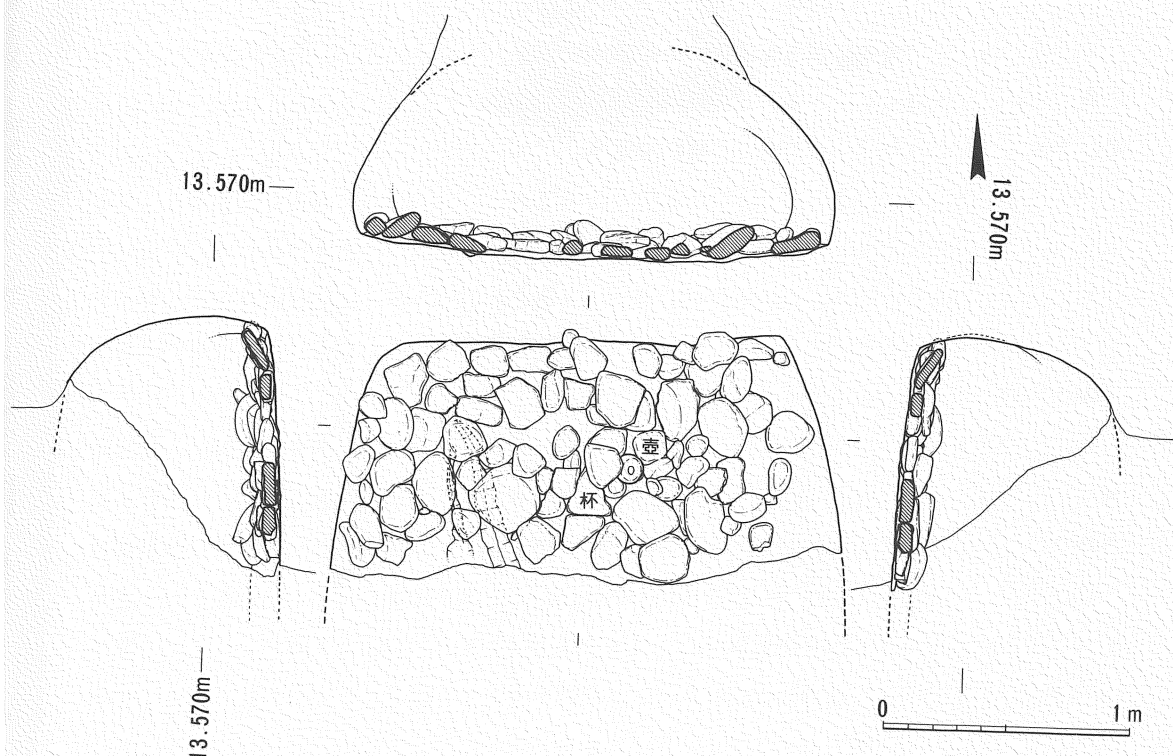
床面には径5~30cmの不揃いの河床礫を用いた屍床を設ける。さらに、その下部には不整形の溝二条を左に寄せて造り出している。

壁面の遺存状態は不良であり、工具痕等は知り得ない。

出土遺物には土師器壺と須恵器杯身がある。面者とも残欠部の中央附近より伏せた状態で出土したが、敷石間のすき間に落ち込み、さらに移動した礫によってその一部が覆われていた。第17図1は土師器壺である。胴部下半を失っている。器形は比較的肩の張る球形胴部から明瞭な屈曲をなさずに、口縁部が直線的に外へ開くもので、端部は丸くおさめている。器表面の剥



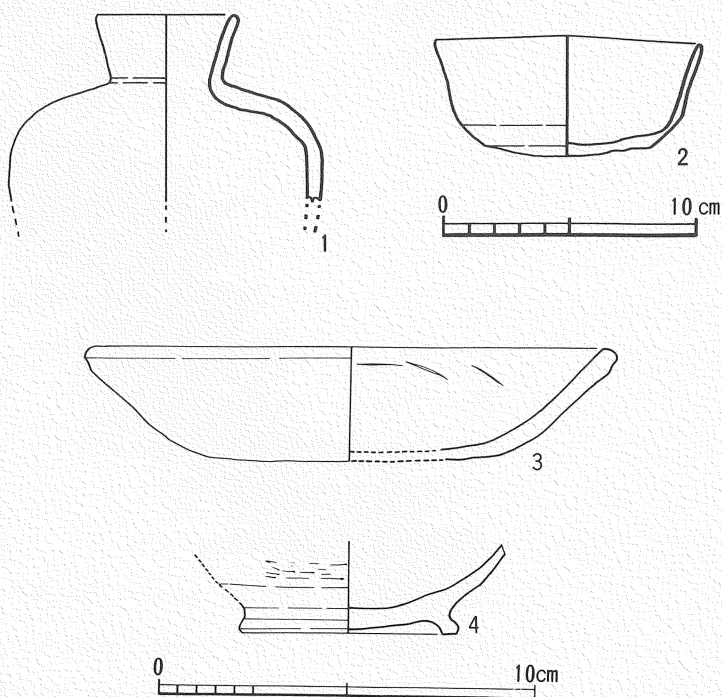
第15図 5号横穴墓
出土遺物実測図 (1/4)



第16図 6号横穴墓実測図 (1/30)

落が著しいため調整方法については明確にしがたいが、肩部外面には手持ちヘラケズリを施している。

2は須恵器杯である。口縁部に歪みが著しく、口径は9.7~10.6cm、器高は4.5~4.7cmを測る。不安定な平底から丸みをもって口縁部が立ち上がる。口縁部は緩やかに外反し端部を丸くおさめる。外底部に不定方向のヘラケズリを加える他は全てクロコ



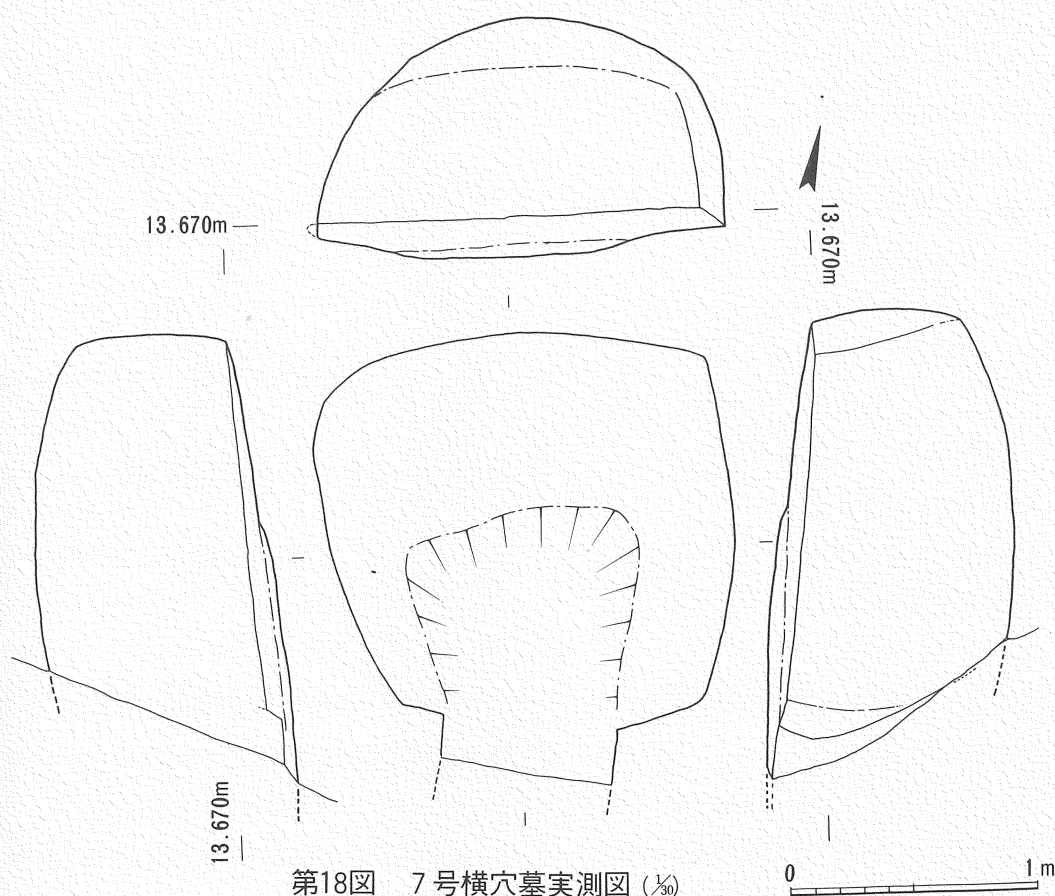
第17図 6号横穴墓出土遺物実測図 (1・2 ⅓ 3・4 ⅓)

による回転ナデ仕上げである。

6号横穴墓ではその他に横穴墓の埋土から数点の細かな人骨と2点の瓦器が出土した。工事で横穴墓の崩壊が進んでいたため2号横穴墓でみられたような状況は不明であるが、この横穴墓も中世にいたり再利用されていた可能性がある。

3は瓦器碗である。小破片のため図上復原してみると、口径14.2cm、器高3cmを測る。底部より外上方に立ち上がり、口縁部をやや肥厚させ外面には凹線風の沈線が認められる。内外面ともヨコナデ仕上げであり、内面の一部にヘラナデ風の痕跡がある。色調は内外面とも燻されてはいるが灰色を呈し体部には炭素が吸着しない部分が輪状に残っている。胎土は砂粒を含まず緻密で焼成は堅緻である。

4は小振りの瓦器碗である。体部上半部を欠いており高台径5.8cmを測る。内面の一部に炭素吸着の状況が認められる。高台は低く外側にふんばっており、体部は下半部にかかるい稜をもち内湾気味に立ち上がるものと思われる。外面の調整はかるい稜の上半部にヘラケズリ痕が顕著に認められ、それより下は回転利用のヨコナデ仕上げである。稜はこのときついたものと思われる。高台内は中央部を除き回転利用のヨコナデ仕上げである。内面は平滑ナデ仕上げで調整は全体的に良好である。色調は灰白色を呈し、砂粒を含まない緻密な胎土であり、焼成は堅緻である。造りは器壁が薄くシャープな仕上げである。



7号横穴墓

6号横穴墓の東約1mにあり、玄室及び羨道の一部を残している。

羨道の開口方向は玄室主軸よりも左に傾く。

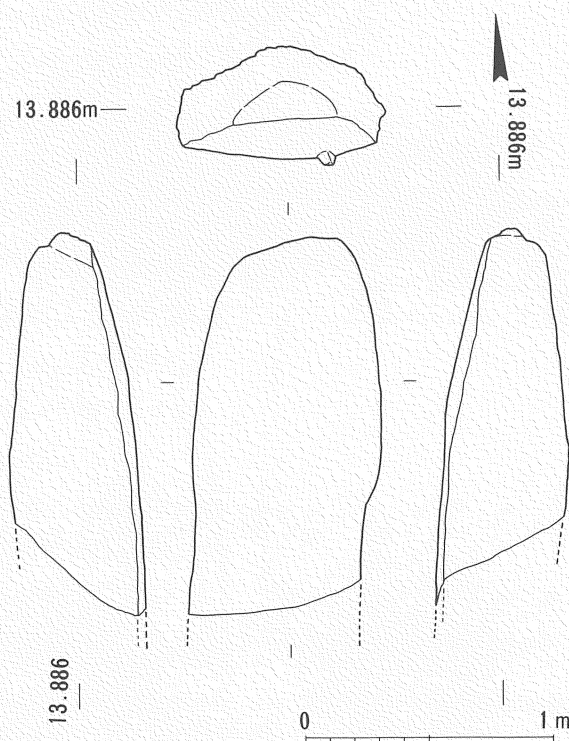
玄室平面形は奥壁に向って広がる隅丸の逆台形状を呈する。玄室床面は奥壁に向って上昇しており、さらに羨道から玄室中央部にかけて一段低い掘り込みをもつ。玄室の奥行は約155cm、奥壁附近に最大幅を有し約160cmを測る。天井形は5号横穴墓と同じく蒲鉾形を呈する。玄室中央部附近で最も高く95cmを測る。床面には礫床等の施設は見られない。

壁面には部分的に工具痕が残る。工具の刃部幅は約10cmを測り、加撃方向は大略右上→左下を示している。

出土遺物はない。

8号横穴墓

7号横穴墓の東約1mに位置する。羨門等入口部施設を失っており、旧形状を推定しがたい。



第19図 8号横穴墓実測図 (1/50)

て完結する。大人一人がようやくもぐりこむだけの広さしか有していない。また、床面には礫床等何らの施設も持たない。

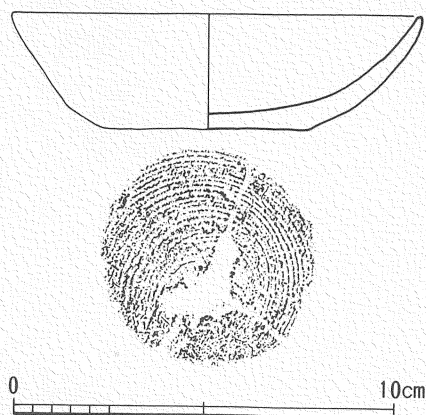
床面・天井部には深く荒い線状の工具痕が見られる。いずれも入口部から奥壁に向って加筆されているが、工具の形状は推定できない。

出土遺物は横穴墓に関するものはなかったが、埋土の中より一点の土師器杯が出土した。口径10.8cm、底径5.5cm、器高3.05cmを測り、口径と底径の差が大きいもので底部から内湾して立ち上がり口縁部にいたる。口縁部は細く尖り気味におさめている。底部には回転糸切り離し痕が認められ、体部は回転利用のナデ仕上げである。色調・胎土は2号横穴墓から出土した小皿とよく似ており、黄白色を示し、多量の微砂粒が混入している。焼成は堅緻である。

9号横穴墓

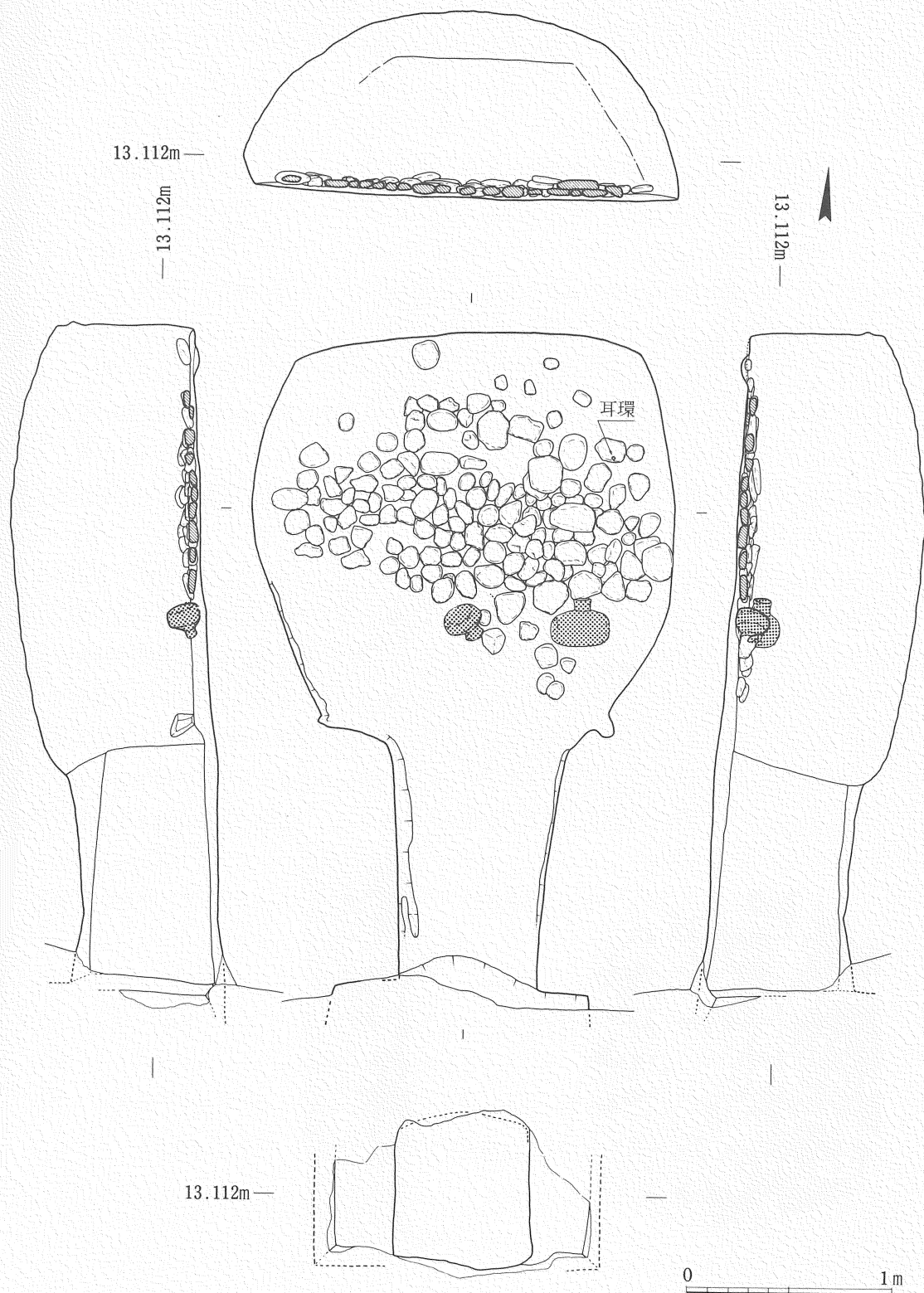
8号横穴墓の東側にあつて、やや低位に開口している。横穴墓群の中で最も良く遺存しており、玄室・羨道の他、羨門の一部をも残している。

羨門部には左右に飾り縁の痕跡が見られる。羨門の正面形は略方形をなし、幅37cm、高77cm

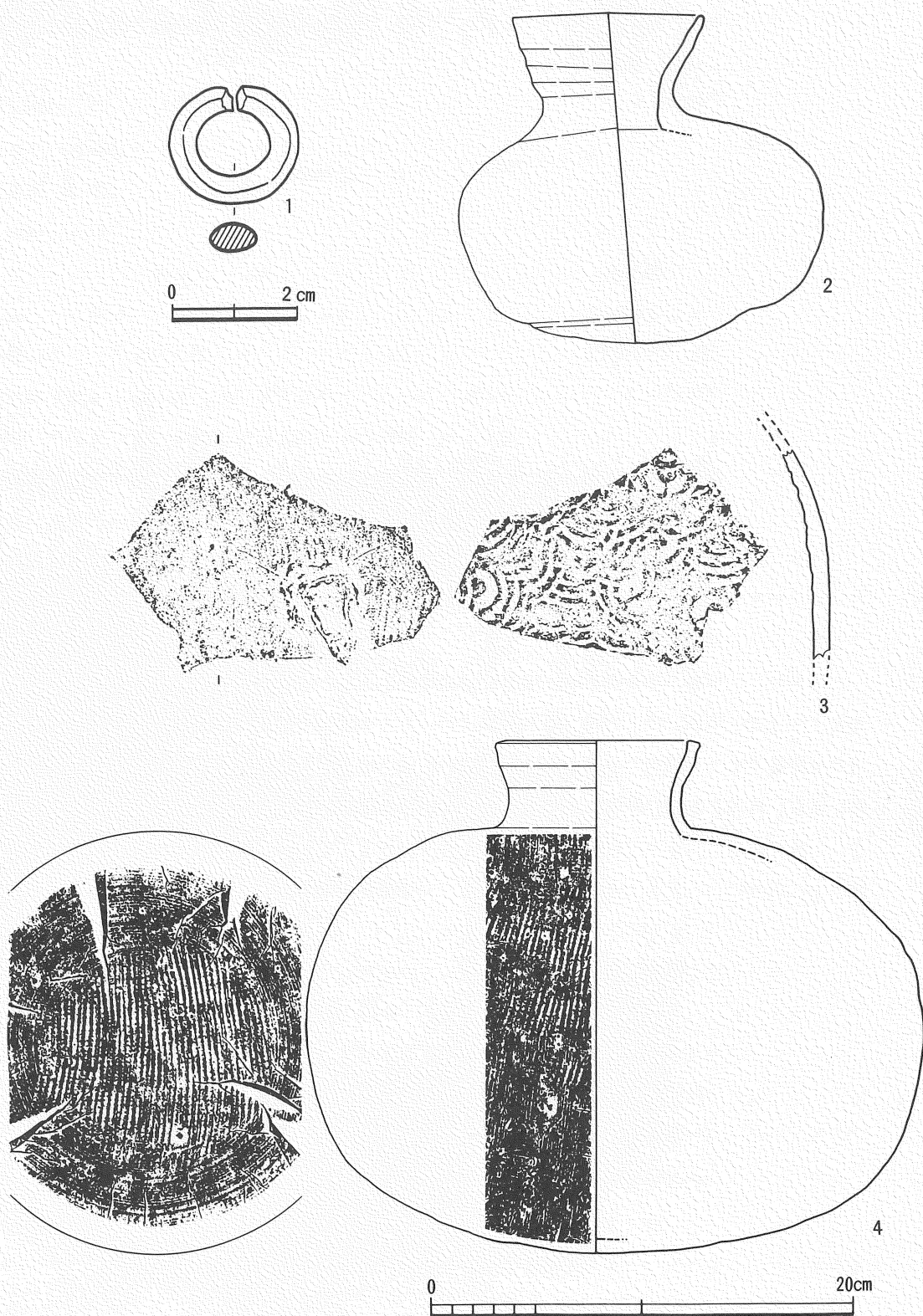


第20図 8号横穴墓出土中世土器
実測図 (1/2)

残欠部分の奥行は約150cmを測るが、ほとんど膨みを持たずに、入口部から奥壁へ直線的に続く平面プランを呈する。中央部でやや広く幅約75cmを測る。天井部は奥壁へ向って降るが、床面が奥へせり上がるのと相まって、奥壁部では尖る様になっ



第21図 9号横穴墓実測図 (1/30)



第22図 9号横穴墓出土遺物実測図 (耳環 $\frac{1}{2}$ ・須恵器 $\frac{1}{3}$)

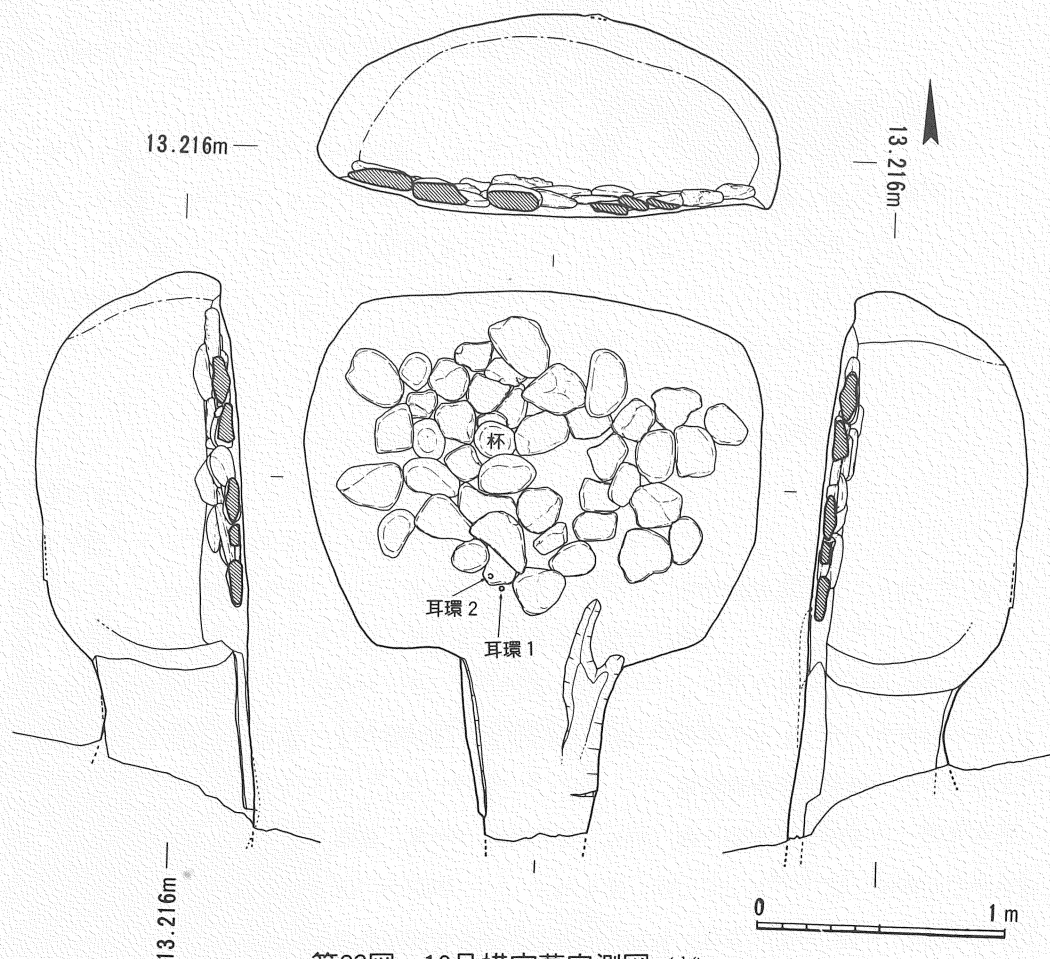
を測る。羨道は長く、やや開きながら玄室へと至る。羨道長約120cm、玄門部で幅約90cm、高さ約70cmを測る。また、左右の側壁沿いに浅い溝を設ける。

玄室プランは胴張りを有する隅丸方形である。羨道から玄室へ緩やかに移行し、特に右側では両者を明確に区分し得ない。玄室の奥行約200cm、奥壁幅約170cm、最大幅約205cm。床面は奥壁から羨門へ向って緩やかに下降する。また左右前壁部に不整形の小穴を横に穿つ。天井形は奥壁がほぼ垂直に立つ蒲鉾形を呈すが、玄室中央部でやや脹んでおり、高さ約90cmを測る。

玄室には右前から左奥へ細長い礫床を設ける。径5～15cmの不揃いの河床礫を密に並べており、ほぼ一体分の屍床を形成している。さらに右側には礫を重ねて枕状の高まりを造っている。

9号横穴墓は壁面の遺存状態が良好なため、工具痕を仔細に観察する事ができた。工具の幅には3cm内外の細身のものと、6～7cmの幅広のものの二種類が見られ、前者による加工面が滑らかであるのに対し、後者のそれは荒々しい。壁面の削り出しはほぼ後者によっており、前者による平滑な削平面は右側壁全体と天井の一部にしか見られず、また両者の切り合いも明確にはし得なかった。従って、一概に前者を仕上げ用の工具と見なすことはできない。また、工具の加撃方向は右上→左下が主勢を占めているが、コーナー部では、左上→右下方向が見られる。また特異な方向として左側壁前半部で左下→右上の加撃が多く見られる。また、羨門側壁には水平方向の線状工具痕が残る。

出土遺物には耳環・須恵器平瓶・横瓶・甕胴部片がある。耳環は玄室右奥の礫上にあり、須恵器2点は礫床の脇に添える様に寝せ置かれていた。甕胴部片は玄門附近から出土した。第22図1は耳環である。銅胎に金箔をおいたもので、突合せ部で金箔をしぼり込む。遺存状態は良好である。長径2.06cm、短径1.85cmを測り、断面は下脹みの楕円形を呈する。重量は7.9g。2は平瓶である。口縁部に若干の歪みが見られ、口径8.7～9cm、胴部径8.6cm、器高7.7cmを測る。口頸部はいったん内傾した後、外反し、やや波打ちながら開き端部は丸い。マキアゲ痕をよく残しており、縦位のカキ目を施した後内外面をナデ仕上げする。胴部は扁平な球形胴で座りが悪い。肩部外面はナデ仕上げ、底部には円盤貼りつけを行った後、それを含む胴下半約 $\frac{1}{2}$ の範囲に粗いヘラケズリを加えている。また、胴部全体にヘラ先で切りつけた様な跡が多数見られる。肩部及び口頸部内面に自然釉が附着している。3は甕の胴部片である。外面に平行叩き、内面には同心円叩きを施す。外面に別個体の須恵器がゆ着している。4は横瓶である。口頸部は一旦内傾した後、内湾しつつ外へ開く。端部はやや外傾する平坦面をなし、若干内側へ突出している。胴部では左右の脹みに差が見られ、さらに、扁平な側（図の左半部）では平行叩き→回転カキ目調整であり、その反対側ではカキ目→平行叩きであることより見て、製作が前者の側から順次行われた事を知る事ができる。



第23図 10号横穴墓実測図 (1/30)

10号横穴墓

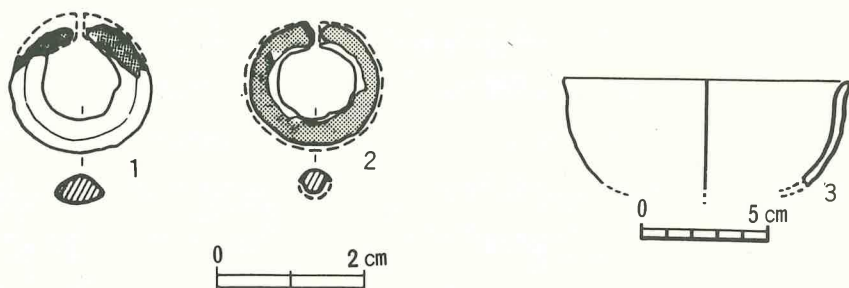
9号横穴墓の東側に約3mの距離をおいて営まれる。羨門から外を欠く。

羨道部は断面方形を呈し玄室へ向い広がる。左側には段、右側には不整形の溝をそれぞれ設ける。玄門部幅約65cm、高さ約60cmを測る。

玄室平面形は平入り隅丸方形でやや胴張りを持つ。羨道部との境は明瞭である。

玄室奥行149cm、奥壁幅152cm、最大幅183cm、を測る。天井部はドーム形を呈し玄室中央部で最も高く82cmである。玄室中央部に扁平河床礫を用いて屍床をつくる。用いている石は径15～20cmのものが採択されており、密に敷いているが、若干の移動が見られる。

壁面の遺存は良好で、工具痕も明瞭である。用いている工具は鉄斧状のもので、刃部幅が4cmのものと5cmのものが存在したようだが、両者の使い分けは識別できなかった。工具の加撃方向は奥壁では上→下のみであるが、左右の側壁では各々上半部と下半部で異なり、左壁では上半部で右上→左下、下半部で左上→右下へ、同じく右壁では右上→左下から左上→右下へと、



第24図 10号横穴墓出土遺物実測図 (1・2 1/4 3 1/2)

両者ともに上半部から下半部へと掘削を進めた状況がうかがえる。また、羨道部の側壁には9号横穴墓と同様、水平に走る線状の工具痕が見られる。

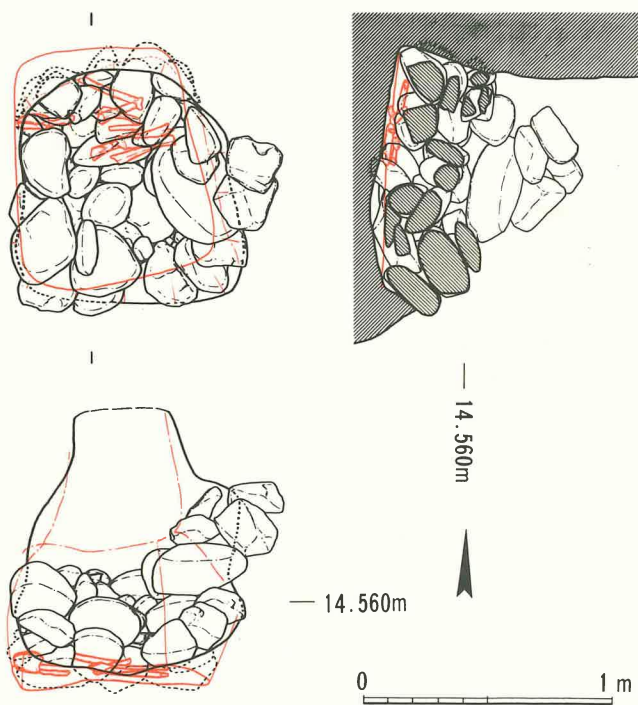
出土遺物には耳環二点と須恵器杯の破片がある。いずれも玄室内から出土した。耳環二点は中央玄門寄りの礫床上に近接して発見され、須恵器片は中央部礫床間に挟まれた状態で出土した。耳環(第24図-1、2)はともに銅胎に銀箔をおいたものであるが、両者ともに著しく剝落している。1の長径は1.91cmを測り、断面は下腹みの楕円形を呈す。2も同様の形状を示すと思われる。両者とも重さ

2gを測る。3は須恵器の杯身である。口縁が著しく歪んでいるが、口径は、10~13cmにおさまるであろう。内外面ナデ仕上げである。

6号横穴墓の杯身(第17図-2)に類似するが、若干大きめで、口縁端部は外反する。

土 墳 墓

9~10号横穴墓間の上方約1mに位置する。すでに削平をうけ、掘り込みの上端は欠失していた。土墳墓から東側にかけて2mほど



第25図 土墳墓実測図 (1/30)

の浅いテラスが残っており、土壙墓に伴う墓道と思われる。

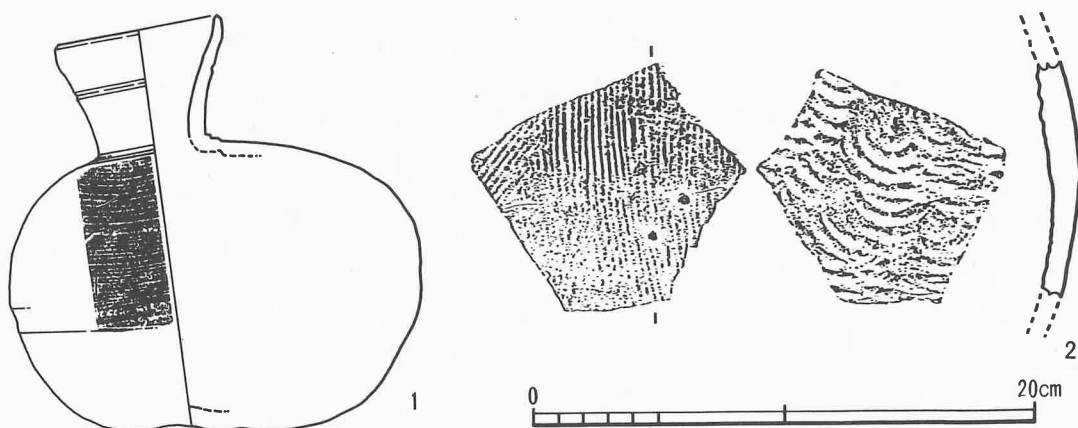
床面は短辺約70cm、長辺約95cmの不整な隅丸長方形を呈し、上方に向って袋状にすぼまる。深さは50cmを越えるものと推定される。

墓壙内には、大は径50cmから小は径10cmまでの不揃いの礫を充填しており、その礫群の下に遺体を安置している。人骨は遺存状態が極めて不良であったが、分析の結果成人男性一体分のものであることが確認できた。

船塚遺跡採集遺物

遺跡発見時に遺物が採集されており、あわせて報告する。

第26図— 1は須恵器平瓶である。7号横穴墓から出土したと聞くが確証はない。口径6.75cm、胴部径16.3cm、器高15.3～16.2cm、口頸部はくびれ部から外反して立ち、端部近くでやや内湾し、端部は丸くおさまる。脹みをもつ胴部はほぼ中位に最大径を有しており、底部は不安定な平底をなす。胴部上半部には回転カキ目調整を施し、底部は指で押えた後、回転ヘラケズリを加えている。他はロクロによるナデ仕上げであり、接合部にも入念なナデを施す。胴部にはマキアゲ痕を残す。2は須恵器甕の胴部片である。外面はカキ目の後平行叩き、内面は同心円叩きを施す。



第26図 船塚遺跡採集遺物実測図 (1/3)

Ⅳ ま と め

船塚遺跡の調査において、11基の横穴墓が検出された。その大半は玄室奥半部のみの残欠であり、遺物はもとより横穴墓の形態等についても十分な情報を提供したとは言い難い。しかし大分県北部では宇佐平野に次ぐ古墳密集地帯でありながら、これまで考古学的知見の少かった豊後高田市域においては、初めての本格的な古墳時代遺跡の調査報告でもあり、ここに若干のまとめを行い報告の責を果たしたい。

11基の横穴墓のうち、大まかに玄室形態を把み得る8基をその平面形によって分類すれば、方形を基調とする1・2・4・7・9・10号と、長楕円形を呈する5・8号に二大別できよう。さらに前者は逆台形状を呈する2・7号と、平入り方形の1・4・10号、そして胴張り方形の9号に分けられる。また天井形によって分類すれば、明らかにドーム形をなす10号、蒲鉾形をなす4・5・7号、両者を折衷した形態をもつその他の一群の三つに分けられよう。

この様な横穴墓の形態的な多様さとは対照的に、床面施設である礫床には共通性が見られる。すなわち、礫床を残していた7基のうち、玉砂利敷きの2号を除く大半の横穴墓が手のひら大の扁平河床礫を用いている点であり、さらには玄室全体を残している4・5・9・10号横穴墓から察して、玄室内の礫床がおよそ大人一体分の面積しか持たず、他に空間を大きく余している点である。また9号横穴墓では、左右に長い礫床の一端に礫を重ねて枕状の高まりを設けており注目される。

出土遺物は種類・量ともに少なく、玉類・耳環・土器に限られる。玉類は2・4・5号横穴墓から出土しており、中でも2号に豊富で勾玉・切子玉各1点、ガラス製丸玉8点を得た。4号はガラス小玉2点、5号はガラス丸玉1点を出土したのみである。また耳環は1・10号に1対、1・9号には1個が副葬されていた。土器は4・6・9・10号から出土した。いずれも6世紀末～7世紀前半代に比定できるものだが、数量も乏しく、特に須恵器による横穴墓の先後関係については、にわかには判じ難い。須恵器は4号に高杯、6号に杯、9号に平瓶・横瓶・甕、10号に杯が、土師器は6号に壺がそれぞれ供献されていた。

以上の事実関係を踏まえた上で、船塚横穴墓群の遺構配置について見てみたい。当横穴墓群では前庭部が全く遺存していなかったが、急崖に形成される横穴墓群の一般的なあり方として人為的な「テラス」状の前庭部と、短い墓道を有することが予想される。それは、わずか東方約1kmに彩色を施す穴瀬横穴墓群が所在し、この横穴墓群の状況からも看取されることであり、大きな証左となろう。また当遺跡の11基の横穴墓をあえてグルーピングしてみると1～5・11号は西側の一群、6～9号は中央の一群、10号は東側の一群と三大別できよう。さらに調査区外では西側に2基が開口しており、これを合わせた計4群が船塚横穴墓群を構成すると考える

船塚遺跡横穴墓一覧表

No.	玄 室						羨道長 m	遺 物		時 期	備 考
	プ ラ ン	長 m	最大長 m	天 井 形	最大高 m	礫 床		土 器	そ の 他		
1	平入り 隅丸長方形	1.3	2	ドーム形	1	—	—	—	耳環(1)		
2	逆 台 形	—	1.7	ドーム形	0.7	玉 砂 利 (全 面)	—	—	耳 環(2)勾玉(1) 切子玉(1)丸玉(8)		瓦器・土師器 人骨8体以上
3	?	—	1.8	—	—	扁平円礫 (全 面)	—	須恵器片	—		
4	平入り 隅丸長方形	1.3	1.8	蒲 鉾 形	0.8	扁平円礫 (奥半部)	0.73以上	須恵器高杯	ガラス小玉(2)	6世紀末～ 7世紀前半	
5	妻 入 り 長 円 形	1.7	1.2	蒲 鉾 形	0.85	扁平円礫 (中央部)	—	—	丸玉(1)		
6	方 形 ？	—	—	—	—	扁平円礫	—	土師器壺 須恵器杯	—	7世紀前半	瓦器 人骨片
7	逆 台 形	1.55	1.6	蒲 鉾 形	0.95	—	—	—	—		
8	卵 形 ？	—	0.75	蒲鉾形？	0.5	—	—	—	—		土師器
9	胴張り 隅 丸 方 形	2.0	2.05	蒲 鉾 形	0.9	扁平円礫 (中央部)	1.16	須恵器横瓶 平瓶 甕	耳環(1)	6世紀末～ 7世紀前半	
10	平入り 胴張り隅丸方形	1.5	1.85	ドーム形	0.8	扁平円礫 (中央部)	0.72	須恵器杯	耳環(2)	7世紀前半	

こともできよう。このうちの西側の一群（1～5・11号横穴墓）では4号のみが下位に位置しており、上位に並ぶ横穴墓とは明らかに異なる前庭部に開口していた事が推定される。上位の一群には礫床に玉砂利を用いた2号横穴墓があり、扁平河床礫敷きの4号に先行するものと思われる。敷石が玉砂利から扁平礫に移行する事実は、三光村上ノ原横穴墓群^{註1}、大分市飛山横穴墓群^{註2}等で確認されており、移行時期は上ノ原において6世紀前半、飛山では6世紀中葉が考えられている。両遺跡例からして、2号から3～5号への移行が想定される。次に3・5号と4号の先後関係はどうであろうか。4号等方形を基調とする当横穴墓群の中にあつて5号や8号は長楕円形という特異なプランを呈している。これに類似する形態をもつ横穴墓は宇佐市一鬼手・加賀山・貴船平横穴墓群^{註3}、あるいは院内町水雲横穴墓群^{註4}等で報告されており、宇佐平野を中心とする分布を示している。これらは横穴墓の袖部が失われたより後出する形態と見ることもできようが、調査例が少なく、また船塚横穴墓群の中では遺物を出土していないこともあつて、

時期差とも地域差とも決し難い状況にある。よって現時点では4号と5号の新旧関係もまた判じ難い。一方東側の一群では2号横穴墓に近い逆台形状を呈する7号墓が古く、他がこれに続くものと理解される。

さて、国東半島の基部にあたる豊後高田市には立地と環境の章でふれたように、古墳時代前期から中期にかけて一大古墳群が形成されている。その立地は半島の他の地域でも認められるように海岸部に集中して分布している。このことは半島の地形条件に制約されていたものと理解されており、^{註5}宇佐市にある宇佐国造家累代の墓と推定されている川部・高森古墳群とは、立地や生産地の様相において若干異なった状況がうかがえる。古墳群の形成はやや後出するものの、存続年代や規模はほぼ同様なあり方を示しており、真玉大塚から入津原丸山にかけての古墳群に葬られた被葬者は、単に小河川の沖積地程度を基盤として出現した豪族とは考え難く、海上交通の^{かなめ}要的側面も考慮しておく必要がある。

しかし、6世紀中頃をすぎると宇佐地方と同様に前方後円墳の造営がみられなくなり、新たな変革を迎えている。寄藻川・桂川の沖積地に新たな古墳が造営されるようになり、付章で紹介している雷鬼岩屋古墳や三ツ塚古墳、鉾塚古墳さらに7世紀に比定されている宇佐市凶首塚タイプと思われる田笛社古墳などの横穴式石室を内部主体にもつ中・小規模の円墳が築かれ、そして、今回調査を実施した船塚・青宇田・穴瀬^{註6}横穴墓群もこの地域に現れる。

これらの墳墓群は、6世紀後半～7世紀にかけて比較的大きな沖積地へ進出をはたした中・小豪族の奥津城として理解される。なかでも、雷鬼屋古墳は本地域においては大型の石室墳であるが、豊前地方の石室墳の変遷^{註7}を見ると巨石を利用して造る傾向は6世紀後半～末頃であり、本古墳もこの頃の年代が与えられるものと思われる。本古墳は旧来縄郷から田染郷へぬける分岐点とも言える位置に立地しており、また6世紀末～7世紀に比定される前述の横穴墓群もそれに隣接して約1km程の間に集中して分布している。このことは、雷鬼岩屋古墳と横穴墓群の被葬者が重層関係の中にあつてきわめて緊密な関係にあつたことを示すものと思われる。そして三ツ塚古墳（1～3号）の存在等を含めて考えれば、来縄郷内においてきわだった地域と言えるであろう。

次に中世期の遺構、遺物についてのべる。中世期の遺物は2号・6号・8号の横穴墓より検出された。その内2号横穴墓からは8体以上の人骨が検出され8体の内7体が成人、1体が小児であつた。性別のわかるものは男性が2体、女性が2体であり、その他は不明であつた。これらの人骨は、それぞれ整合性がなくバラバラの出土状態を示していたが、供献された遺物の状況等からみると改葬され一括して再埋葬されたものであろうか。供献土器は瓦器碗3点、土師器小皿1点である。6号横穴墓からは細片人骨と2個の瓦器片が検出された。しかし、工事による破壊がはなはだしく原位置を知り得る状態ではなかった。8号横穴墓についても6号と同様の状態であるが1点の土師器杯が出土し人骨は検出されなかった。このように、3基の横

穴墓について再利用されていた状況が明らかとなり、数少ない中世期の埋葬、送葬に関する資料を得たことは決して良好な状態とは言えないが注目される事柄であった。

さて、供献された土器の年代であるが、6号出土の瓦器碗（高台を消失し杯形をなしたもの）以外の瓦器については、管見の限りでは類例を知り得ず実のところ年代の決めてを欠く。土師器杯・小皿についても、現段階のところ豊前・豊後地方では類例にとぼしい。

6号出土の瓦器については、最近宇佐市域内で出土した瓦器を輸入陶磁器や土師器との関係の中で編年が実施されており、11世紀末～15世紀にかけての大きな変遷が提示されている。^{註8}それによると、大楽寺遺跡（応永25年・1425年）出土のものに酷似しており、15世紀前半頃の年代が与えられる。その他の瓦器碗（2号・6号）については、黒色土器から派生して11世紀末か12世紀初頭頃出現する瓦器碗と比較すると、しっかりした高台、内外面における入念なヘラミガキ等の特徴は類似しており一見古い様相が看取される。しかし、外面における全面ヘラケズリ成形（調整）した後ヘラミガキを施し一部ケズリ痕を残していること、法量が小さいこと、口縁部が肥厚すること、焼成がきわめて堅緻で胎土もいわゆる瓦質陶器に酷似することなどの要素がみられ出現期の瓦器とは異質の部分が多い。特に2号第10図-3のヘラ記号ある瓦器碗の形態は特異である。

最近宇佐宮弥勒寺跡や高森城跡^{註9}の調査において16世紀代の遺物とともに小形碗（瓦器質）が出土し始めている。この碗は、比較的高台がしっかりしており、ミガキ調整はあまり顕著でないが外面にケズリ痕が認められ、口縁部が肥厚気味であるなど船塚例と類似する内容を有しており注目される土器群である。しかし造りは雑で法量がさらに小さくなっており、高台も低く、ミガキの状況もずいぶんと異なっている。むしろ船塚例に後出するような状況とも考えられる。^{註10}

11世紀末ないし12世紀初期に出現した瓦器碗はしだいに粗雑な造りになり、終末段階には高台を消失し杯形に変化して行くことが宇佐地方で確認されており、その終末年代については15世紀前半頃とされておりその後どの程度下るのは現段階ではつかめてない。いずれにしても、上記の系統にはいる瓦器碗は最終段階になると高台を消失し、丸底の碗ないし杯状を呈してくるのであり、16世紀になり、また高台がつくものが現れてくるものかどうか問題である。

船塚例の瓦器碗はすでにのべたように、宇佐宮弥勒寺例に比べ古い様相をもっていることは明らかと思われ、15世紀前半頃のいわゆる終末段階の瓦器碗と小形の高台を有する碗が6号より出土している。これは出土状態において共伴とは言いきれないまでも一応の参考としたい。とすれば、いわゆる瓦器とは特徴の異なる瓦器がある時期併行することとなり、どうも別系統の瓦器もどきの土器が存在しそうな感じがするのである。そして、現在までのところ船塚2号出土の3点^{註11}が最も古い様相を呈しており、共伴した土師器小皿や小皿の特徴に酷似する8号出土の杯の法量（主に口径の法量）を宇佐地方の土師器と比較してみると14世紀をさかのぼるも

のではないようである。

以上のように、2号出土土器の年代については比較する資料に乏しく判然としない部分が多く残っているが一応14～15世紀の幅の中で考えておきたい。また、別系統の瓦器の存在を考えてみたいが地域差・機能差（供献等）等の要素を考慮すればまた別の結論を導き出せる可能性も大いに残っている。さらにこのような土器を瓦器として分類してよいものかどうかの点も含めて今後の資料の増加に期待したい。

最後に9号と10号横穴墓の間において検出された土壙墓について若干ふれておきたい。詳細は事実報告の項にゆずるが、床面は70cm×95cm程の隅丸長方形を呈し、断面は袋状をなしている。そして、成人男性一体分の人骨が床面より検出され、その上部に大・小の礫がぎっしりつまっている状態が確認された。礫は墓蓋の上位に積み上げられていたものが陥没して墓壙内に堆積した状態ではなく、当初より礫を入れたものと理解され、また、急斜面上にテラス状の施設を造り、きわめて条件の悪いところから縦方向に墓壙を穿つといったことを行っており、きわめて特異なあり方を示している。出土遺物がなく年代については不明であるが、横穴墓に通じる墓道が崖面に並行してあったと想定すると、テラス状遺構の性格についても理解しやすい。このことは一応14～15世紀の幅の中で推定した横穴墓再利用のあり方、例えば2号横穴墓においても人骨とともに多くの礫が検出されており、土葬と改葬という性格の異なる埋葬形態を取ってはいるものの一つの墓域を形成していたものと理解できないだろうか。いずれにしても類例に乏しく今後に期待したい。

註1 『上ノ原遺跡群』Ⅰ～Ⅲ 大分県教育委員会

註2 『飛山』 大分県文化財調査報告第28輯 大分県教育委員会 1973

註3 「第三章 宇佐地方の装飾古飾古墳」『鶴見古墳』宇佐市文化財調査報告書第1集 宇佐市教育委員会 1975

註4 『院内町誌』院内町誌刊行会 1983

註5 真野和夫「古墳時代」『大分の歴史』大分合同新聞社 1976

註6 昭和51年、道路拡幅工事に伴って大分県教育委員会が穴瀬横穴墓群の西方の崖面において、5基の横穴墓を調査している。報告書が刊行されていないため詳細は不明であるが、平面・断面形態は船塚にきわめて類似した内容を呈しており、6世紀末頃の遺物が出土している。調査者は、この横穴墓群を青宇田横穴墓群としているが、位置関係からみて、青宇田横穴墓群とするよりは、穴瀬横穴墓群の西端の一群として位置づけた方がよいであろう。とすれば、現在彩色のある横穴墓群を含めて19基が確認されており、5基が加わり24基となる。ちなみに青宇田は15基程度であり、船塚は13基となる。

註7 長嶺正秀 他『恩塚古墳』苅田町文化財調査報告書第3集 1984

酒井仁夫 『天仲寺古墳・広運寺古墳』吉富町文化財調査報告書第1集 1983

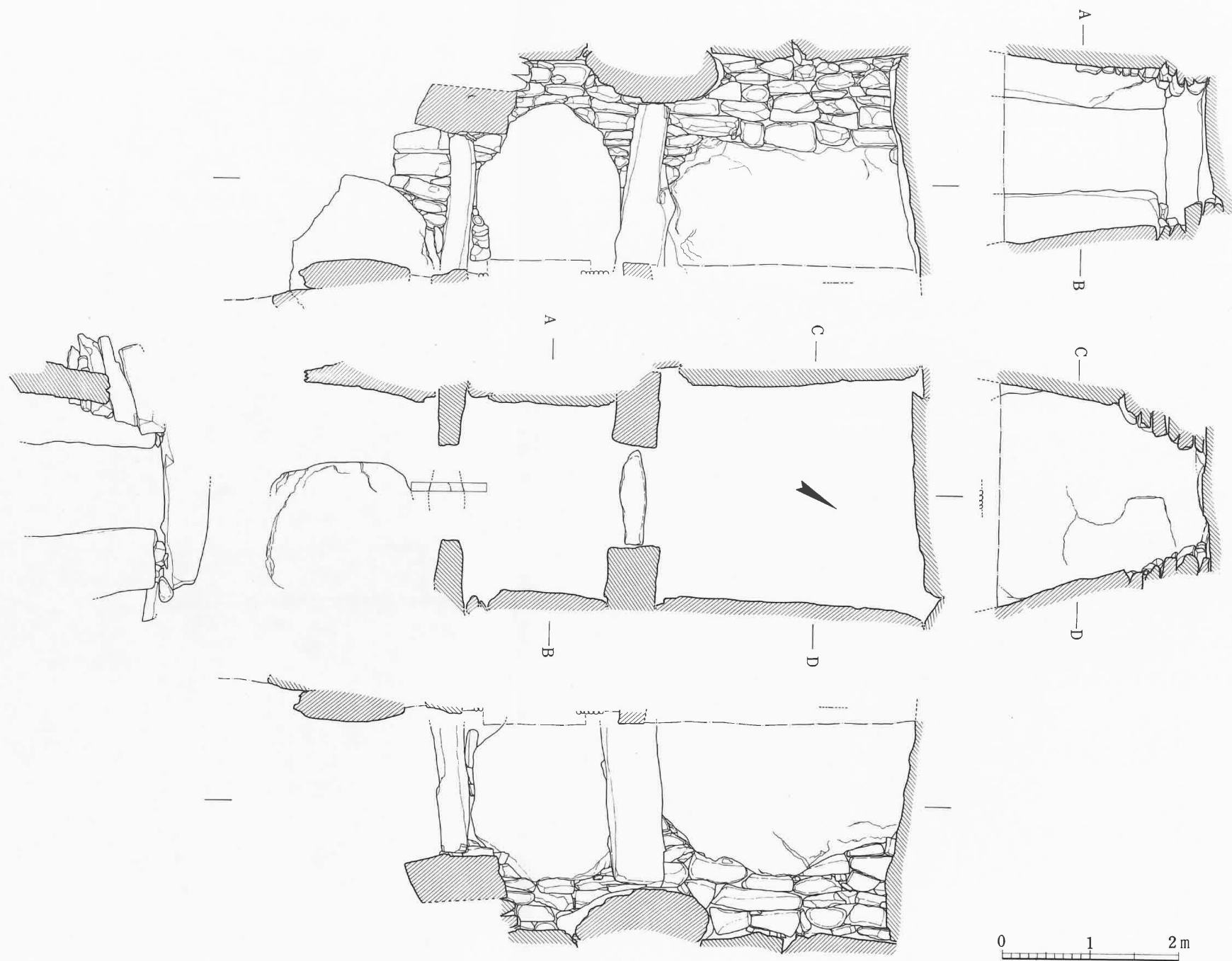
註8 小倉正五 「宇佐地方の瓦器碗について」 『古文化談叢第14集』 1984

註9 宮内克己氏の教示による。

宮内克己『宇佐宮弥勒寺跡調査概報Ⅱ』 大分県立宇佐歴史民俗資料館 1985

註10 小倉正五氏の教示による。

註11 このように、口径と底径の比が大きくなるタイプの杯・皿は、本地域には類例が乏しく、むしろ、長門や周防地方に多く分布しているようであり、この地方との比較についても今後行う必要性があろう。



第27図 雷鬼岩屋古墳石室実測図

付 雷鬼岩屋古墳

古墳は、豊後高田市大字美和字雷に所在し、船塚横穴墓群の位置より東方へ約1kmの台地上に立地する円墳である。

現状は、墳丘は後世の削平のため石室の一部が露出するほど崩壊が進んでいる。石室は羨道部の一部が消失しているが内部そのものは良好に遺存している。内部主体は南西に開口しており、羨道東壁腰石が内側にたおれており、羨門楣石が露出している。

石室構造は、複室両袖の横穴式石室であり奥壁（鏡石）等には巨大な一枚岩を利用するなど広い空間を有す構造を呈している。現存長約7.3mを測り、前室・玄室の入口には梱石・袖石・楣石を設け堅牢な造りとなっている。床は現在厚さ約20cmの土砂が埋っており、一部掘り下げたところ小砂利が検出された。このことから、床面は小砂利を敷きつめた礫床と思われる。玄室奥壁には巨大な一枚岩を約6度内傾して立て、側壁は前・玄室とも、巨大な一枚岩の腰石の上に、やや持送りながら扁平気味の割石や河原石を比較的乱雑に積み上げ天井石を横架している。天井石は玄室2枚、前室で1枚である。石材は安山岩系統である。

玄室は縦長の長方形プランを呈し、奥行約2.86m、幅行約2.48m、高さ約2.48m、玄門幅1.1m、高さ（梱石から楣石）1.8mを測る。前室は横長の長方形を呈し、奥行約1.64m、幅行2.14m、高さ約2.46m、羨門幅1.06m、高さ1.55mを測り、玄室に比べ小規模であるが高さはほぼ同じである。羨道部幅は片側が倒石しているため定かではないが前室の幅に近い数値と思われる。

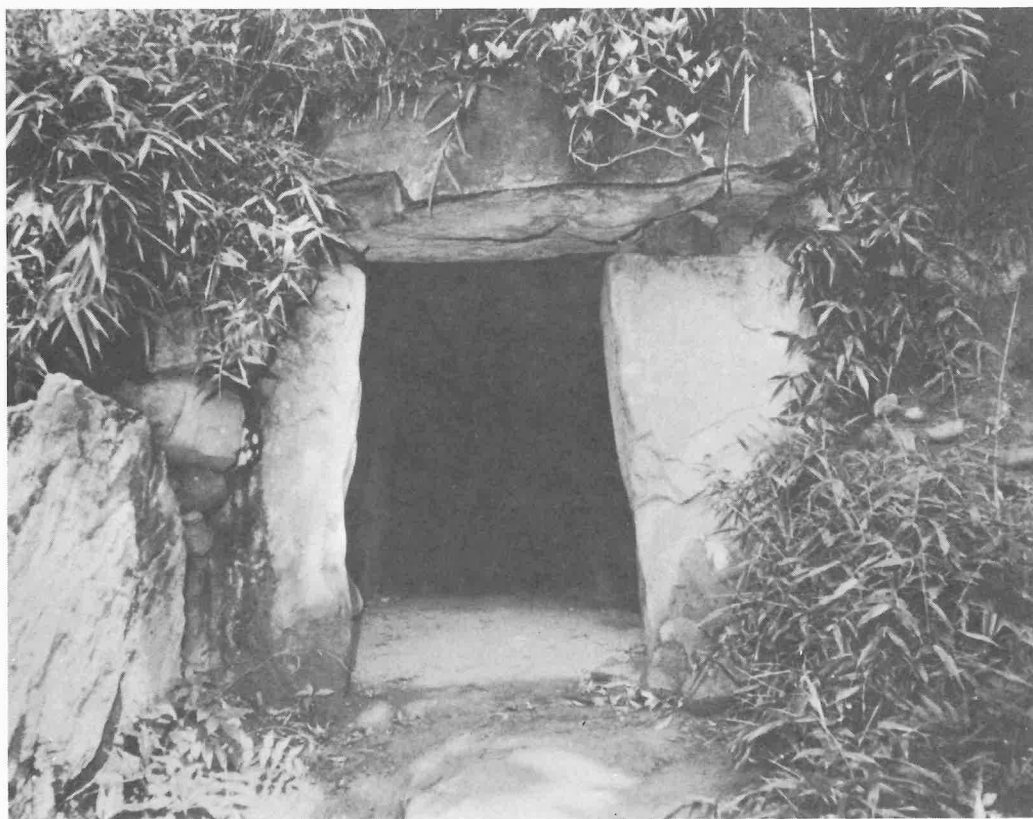


圖 版



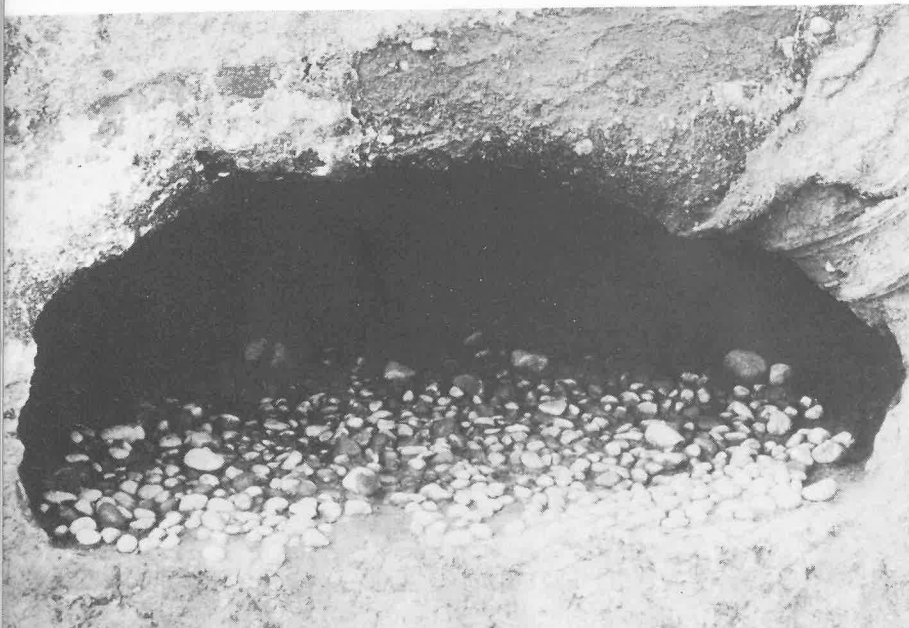
上：船塚遺跡遠景 下：船塚遺跡近景



1号横穴墓

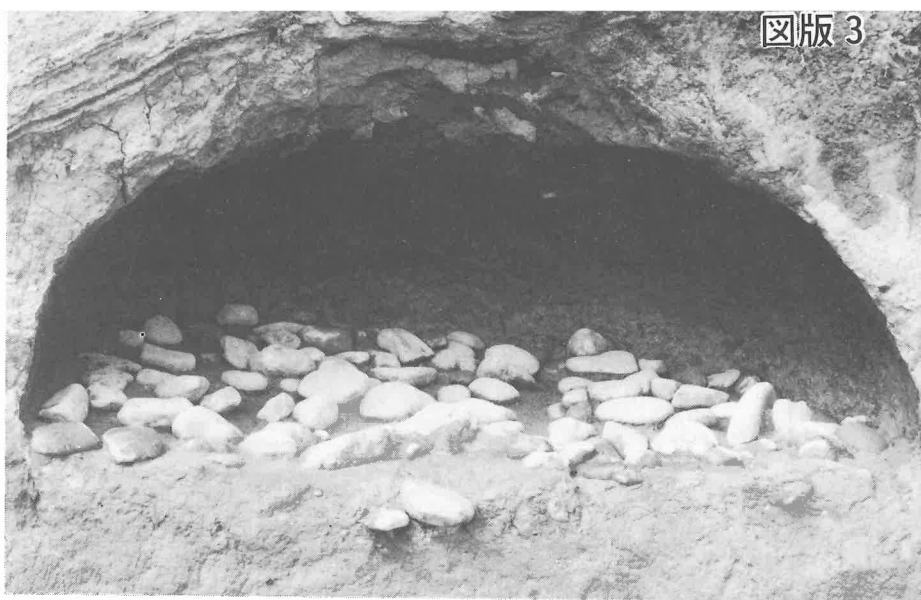


2号横穴墓中世人骨
遺物出土状況



2号横穴墓礫床

3号横穴墓

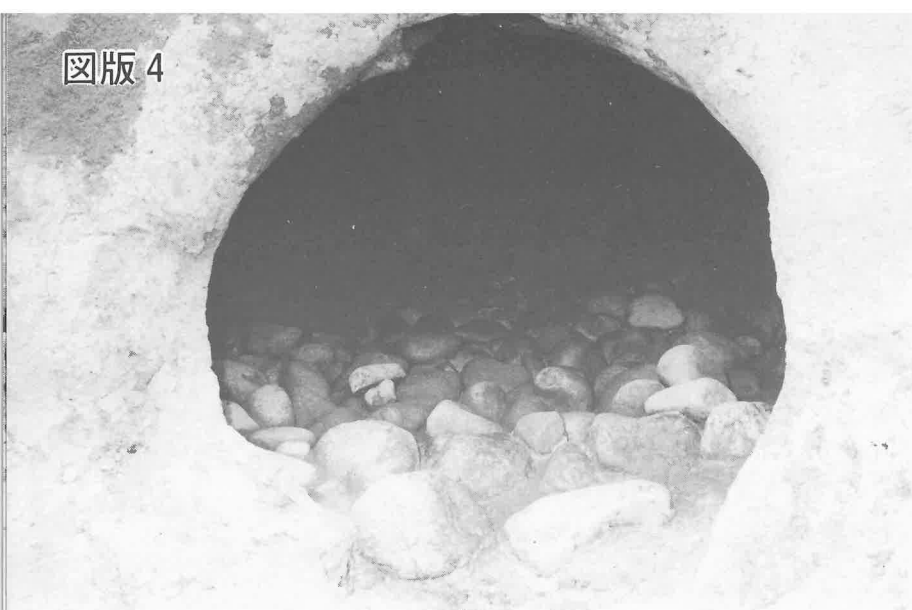


4号横穴墓玄室内の状況

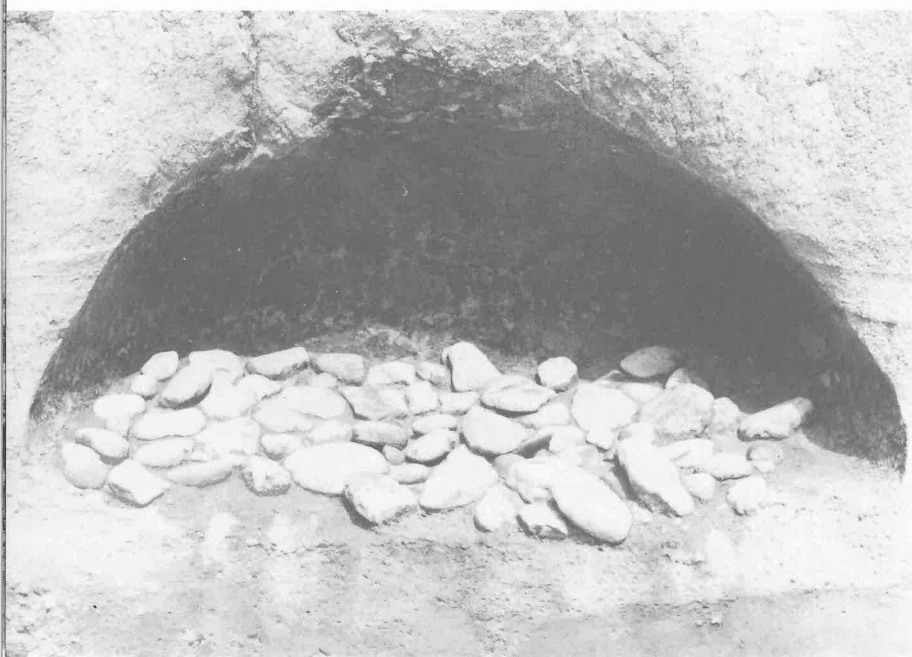


4号横穴墓遺物出土状況





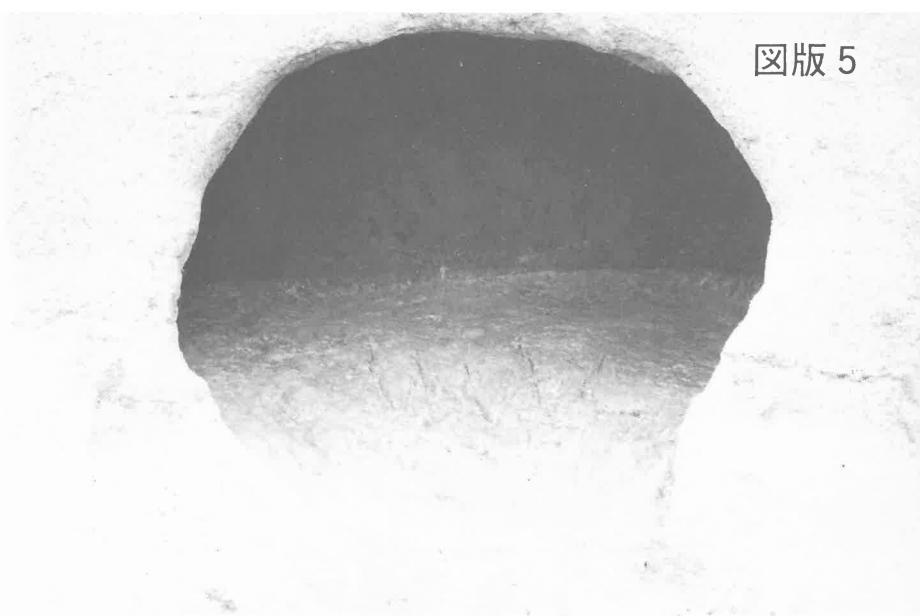
5号横穴墓



6号横穴墓



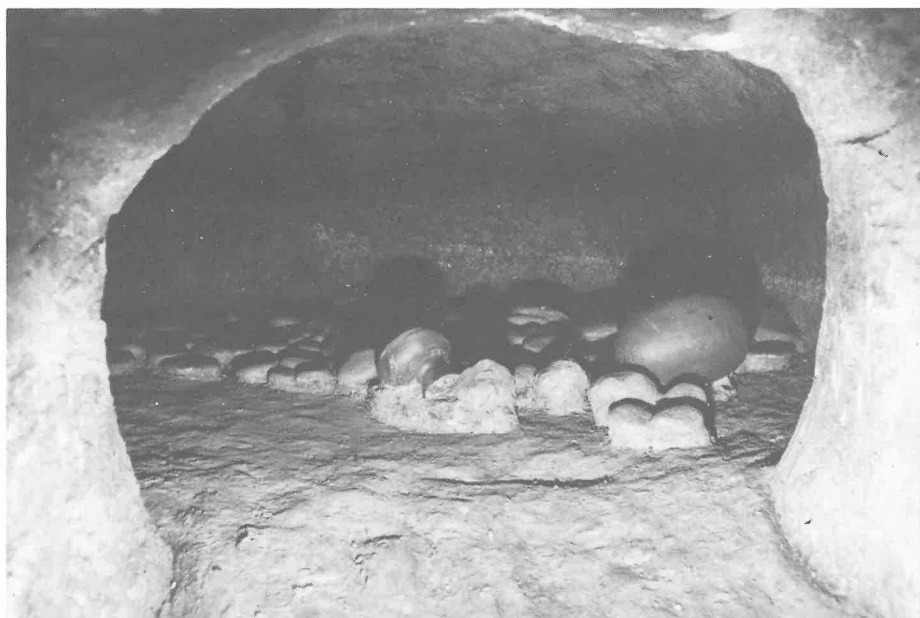
6号横穴墓遺物出土状況



7号横穴墓



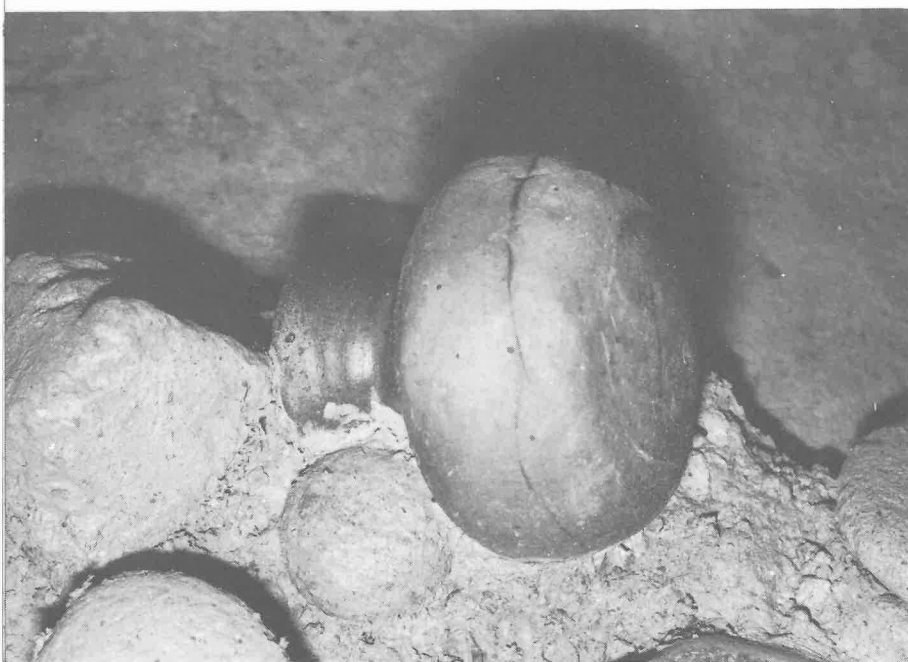
8号横穴墓



9号横穴墓玄室内の状況



9号横穴墓遺物出土状況(1)



9号横穴墓遺物出土状況(2)

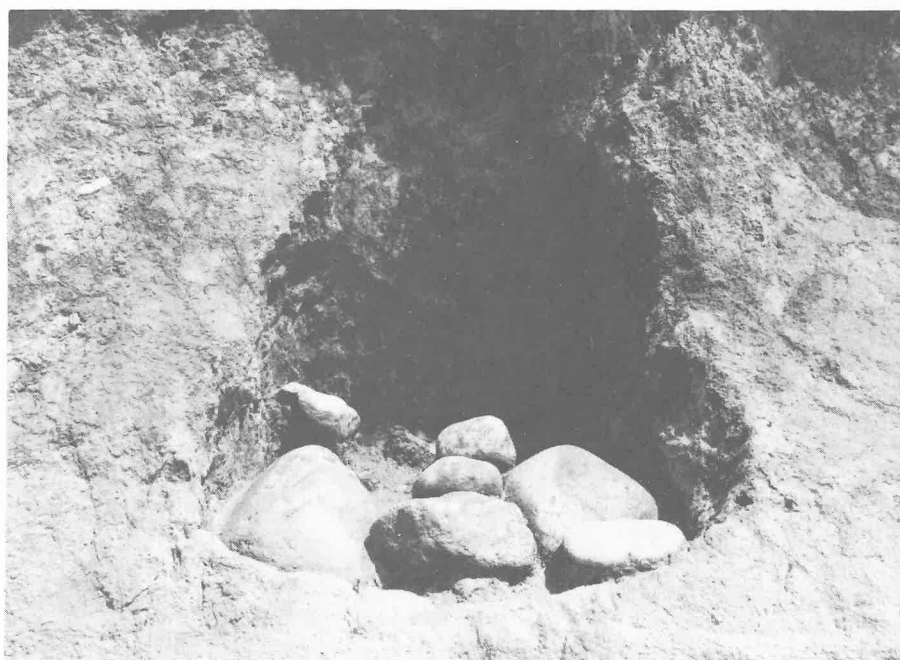


10号横穴墓玄室内の状況

10号横穴墓遺物出土状況



土 壙 墓 (1)



土 壙 墓 (2)

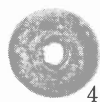




土壤墓人骨検出状況

装身具

- 13……………1号
1～8、10、14、15…2号
11、12……………4号
9……………5号
16……………9号
17、18……………10号





6号



4号



10号



6号



9号



9号



2号



6号



2号



2号



2号



8号

横穴墓出土土器

船 塚 遺 跡

大分県豊後高田市所在遺跡発掘調査報告書

大分県文化財調査報告

第 6 9 輯

1985年 3 月28日

発行 大 分 県 教 育 委 員 会

印刷 (株)大分美術印刷センター
